

詩 文 學 研 究

第 三 輯

1939

東 京

詩 文 學 研 究 會 版

詩
文
學
研
究

第
三
輯

1939

詩文學研究

第三輯

一九三九年六月版

エッセイ

詩人と人格	楳浦正之	六
現代詩に關するノート	濱名與志春	二
純粹詩論	ボウル・ヴァレリイ	七
詩の難解と哲學詩人	T・S・エリオット	元

詩作

肉體出發	竹川口敏	一
春への組曲	柴俊介	五
丘への歌	池田日呂志	三
春への上	葛井和雄	三
地信	樺澤友佳	四
私集	奥山五百枝	元
北方海岸にて	西山五百枝	元

美しき七月に	奈良良進	元
移民地にて	渡邊和郎	四
青インクの會話	小林正純	四
白日三題	渡邊正純	四
昇天	堀口太平	四
都會のデッサン	木下夕爾	四
青嵐	梶浦正之	四

譯詩・感想

ダイオニサス	ミチエエル・ロバアツ	五
北方の性格	奥邊曠	彦
詩作	渡邊曠	彦

詩作

まみれよ花粉	長谷雄二	天
ロマ	小池亮夫	天
血縁	川越勤	天
雲を蹴とばせ	清水達子	天
いにしへの落書	長谷川霧子	天
秋像	法城寺閑空	天

鬼	小	單	宴	花	秋	貝	わ	虛	北	折	船	追	山	砂	追	書	筵	紅	雪	昇
	さ	なる			夜	殻	か			れ	の		裡	丘			上	宴		
の	な	る			無	中				た	中		初				の	片		
貝		記				の	れ			旗	の	憶	夏	詩	想	齋	老	隅		
死	殻	録			想	理		壁	竿	上							婆	にて	景	天
:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:
:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:
:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:
:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:
:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:
:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:
:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:
:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:
:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:
:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:
:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:
前	桑	伊	茅	杉	挽	江	木	小	佐	塩	伊	吉	堀	嶺	松	津	丸	梅	上	國
	門																			
田	つ	藤	野	山	地	越	村	松	藤	谷	野	成	江	皖	村	坂	山	澤	松	廣
	た	隆	信	眞	英		茂	茂	菁	安	亨	糸	信		一		吉	恒	ち	勝
威	子	夫	義	澄	夫	馨	雄	彦	雄	郎	二	子	夫	彦	美	霞	郎	夫	子	郎
:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:
充	犬	七	夫	五	五	五	三	三	三	七	七	充	充	充	充	充	五	五	五	三

花と蝶
北の掟
ある挽歌
白い手の祭
除夜の
藤井伸
冬木之介
小林節子
小浪里子
藤橋勝利
大橋三

[illegible]

池上ひさ子	野田久子	垣しげる	紀幸子
伊藤照子	松本祐順	田中豊	加藤静夜
朽木博	稻垣美子	邱淳洸	初井利彦
鶴直皓生	石田節子	石塚まさ子	大河原裸木
息	息	息	息
後記	後記	後記	後記
編輯	編輯	編輯	編輯
消	消	消	消

詩人的人格

——現詩壇の二大潮流に就いて——

梶 浦 正 之

現在の詩界は大正末期から繼續した自由詩的角度の人生派的傾向と昭和初期に西歐から輸入した超現實派の進展である形式主義的傾向との二大潮流に岐れてゐると見做してよいであらう。

前者は詩の内容的なもの——しかし之は對象といふ廣汎な意味ではなく、散文的に謂ふ處の意味に重点を置いてゐる——換言すると詩に何が歌はれて、あるか、の問題を不斷に考慮してゐるもので、この傾向に屬する詩人は作者の人生觀とか實生活とかいふものが直接的に作品の上に反應する効果を見守つてゐる。従つてモラルの解釋が議論の中心になつたり、作者の作品に對する思想的背景が唯一の條件となつたりしてゐる。その極端な現象は、あらゆる藝術の必須的根原である内容と形式との有機的因果關係までも無意識の裡に輕視して、宛も内容的なものが主位で形式的なものが従位であるが如き錯覺をさへ與へるに到つてゐる。

翻つて後者即ち形式主義的傾向にある人々は——元來この傾向の信條的觀念は純粹詩の分析的歸結（註一）から展開されたのであるから——詩に散文的の意味、換言すると思想的背景のあらゆる現象、道德とか人格とか社會批判とか實生活とかの問題を超越した純粹的な情感が構成する知性を重要視してゐる。従つて詩に表現された形式が問題の中心となつて、詩に何が歌はれてゐるかでなく、如何に歌はれてあるかに重点は注がれてゐる。この傾向の極端なものになると、例へばガアツリユード・スタイン、ルネ・マグリツド等の詩人は、その形式の意

圖するものが音樂や繪畫を唯一の目的とするかの如き詩を作り、「形式が内容を規定する」といふ信條を「形式が内容を詩以外のものに規定する」と誤解してゐるかに感ぜられる。（註二）更にもつと亞流的な存在になると詩人は形式的な創造と技術を呑込みさへすれば一人前で、人間的修養、文化的教養などは何處の風が吹くかといった態度である。

扱て現在の詩界の之の二潮流が並行的に進展してゆくとなると、どんな結果となるのであらうかといふ疑問は誰もが當然抱く處であらう。恐らく之の二潮流は竟に藝術の偏重主義のどん底へ轉落してゆくであらう。一方は歌はざる偉大な鷲の森の奥へ、一方は雄辯なロボットの夢の苑へ。

この二傾向を批判する事は文學的教養ある讀者にとつては稍々憂鬱な常識問題ではあるが一應謂ふべき事は述べて置かねばならぬ。

詩の純粹性といふ問題は現代詩の新發見でも何でもない、それは詩の本質的な根原であつて、唯、近代詩學が之の本質原理を具体的に解剖指示した迄である。詩人の人格とか人間的教養とかいふ問題は社會人としての先行的存在で、敢て藝術家に限られたものではない。唯、藝術家がその作品に依つて社會に與へる影響の根強さを考へる結果、この教示と啓蒙が社會的に一層強要されるのである。ここで詩の社會的効利性を考へる事は尙一層憂鬱であるが、詩は精神的に情操乃至思想を、現實的には言葉文字の効用性の擴大と強化とを各々社會的に惠與してゐる事は他の文學の社會的現象としての意義と同様であることは謂ふ迄もあるまい。乍然、詩の社會的効用性は詩の客觀的考察に認識する處の文化現象批判であつて、詩人自身は寧ろ之の効用性を超越する事に依つて愈々その社會的効用性を發揮し得るのである。「詩は情緒の放縱なる顯現ではなくして情緒からの逃避である。詩は人格の表現ではなくして人格からの逃避である」（註三）事に依つて反つて社會的効用性の意義を將し得る。乍然

この人格と情緒とを超越し得る詩人とは如何なる社會人を指すのであらうか。それはとりも直さず「人格と情緒を持つ人々」こそ、その意義を認識し行動し得るのである。現下戦時体制の吾國の文學者が、その作品を國策線に添はしめるといふ事は慎むべき現象といふべきではあるが、文學の本質的な雰圍氣がこの現實的現象と交驛する刻に、血の語る民族的情熱や意識が詩化され得るのであつて、所謂一夜漬や泥繩式作品を排斥すべきは當然である。更に文學の廣汎な社會的効用性と本質的意義とを考へるならば、愛慾的素材乃至主題の如き極めて純粹な情感を取扱つた作品等をも徒に無視すべきではないのだ。

詩構成の諸機能に關する過程を科學的知性に依て攻究するの結果、現代西歐の詩學は詩を形態としての實體にまで轉化して了つた。乍然、この詩の實體化を以て直ちに、それは空虚且つ無内容なものであり、外部的な骨組の概念にまで陥つたものであると非難することは余りに早急な斷定である。詩の實體化それ自体が不可なりと謂ふのではない、それは觀念と形式との有機的關係に立つ處の現象的實體として肯定さるべきである。形式偏重の出發は、この實體としての形態が所有する觀念の解釋の相異から始まるのである。およそ如何なる形態と雖も何らかの觀念をも齎らさぬといふことはあり得ない。乍然、形式主義者の多くは「形式は内容を規定する」といふ信念を履き違へた。彼等の形式は内容を詩に規定しない程度にまでも到つたのである。即ち、その形式自体の目的とする意圖を詩觀念と乗離した觀念や心象にまでも導いて了つたのである。(註四)形式の意圖する觀念は内容を規定するが故に、その形式は内容の單なる説明や肉付ではない。完全な詩とは其の構成法に依つて内容が被はれてゐるやうなものではない。詩觀念が構成形態から分離出來得るやうな詩は不完全である。先驅者の詩の特徴と危険性とに似た現代西歐の巨匠達の詩作の意圖は「原子の可能性を探究する爆發的エナジイ、即ち分子を離散せしめる」(註五)ことにあることは現在の吾國の自由詩的傾向乃至思想的傾向にある詩人達も同様であつて、大

正末期から「藝術の圓光」とか「詩人の人間性」とか「モラルの強調」とか、種々な社會人としての啓蒙的な言葉が吐かれてゐる。これに反してモダニストな詩人の不變の意圖は「この原子の可能性探究の必須に於て論理的構成と形式の必要とを相互にテグハグにならぬように努力することであり、今日の詩の第一義的なものは、より効果的な表現、より正確な形式を持つこと」への關心である。

想ふに詩文學批判の根原的使命は、何が如何に歌はれてゐるかに存在する事は今更謂ふまでもあるまい。一方は内容的原子の可能性を全目的とする求心力が形態的な表現分子を輕視したもので、詩に何が歌はれてゐるかの散文的意味、即ち内容偏重主義へと赴く危険性を多分に含むものと見做してよいであらう。素裸の思想や感激が空威張して、歌はざる鶯が詩園に群生する事を、そんなに熱望するのなら、いつそ藝術なんかは否定し去つた方がよいであらう。

他方は之の求心力の可能と効果とは當然形態的分子へと還元されなければならぬが故に實體としての詩の方法論に專念するものであるとしても、更にその方法論が詩を如何に構成的に組立るとしても、尙、人間的修練が不要であるといふ理由にはならない。詩の客觀的考察、文化的現象としての詩の効用性は前言したので此處では措くとして、詩人が詩作の方法の諸問題に逢着する場合に於てすらも、經驗の蓄積の結晶が藝術の素材を形成するものである限り、その經驗の把握する素材自体への作者の深い洞察や批判選擇が當然加はるべき筈である。その經驗の生誕と素材の成育との母胎とも謂ふべき實生活に人間的修練、人格等が重要な役割を努めてゐるのも亦當然である。

乍然、詩人にあつては人格や個性が不變に沈滞することを許さない「詩人は、その瞬間に、現在する儘の自己を、より以上に價值のある何者かに絶えず屈從させるのである。藝術家の進歩とは不斷の自己犠牲であり、絶え

ざる人格の消滅である」(註六)若し人格の消滅といふ言葉が氣にかかるならば人格の不斷の革命であるといつてもよい。其處に詩の多様性と進展性とを吾々は信ずる事が出来るであらう。

詩といふ嚴かな知性の祭典に列し得るものは尠くとも二枚の重要な入場券を所有せねばならぬであらう。それは一切の人間的教養と之を應用詩化せしむる處の詩法とである。

あゝ、歌はざる偉大な鶯よ、いつこの森へ飛ぶか？

雄辯なロボットの夢よ、いつこの苑へ彷徨ふか？

註一 純粹詩の代表的エッセイとしてポール・ヴァレリー(Paul Valéry)の *La Poésie pure* マンリ・マンロン(Henry Brémont)の同題のものを挙げる事が出来る。前者は「詩文學研究」の本輯に紹介しており、後者は部分的ではあるが拙著「詩の原理と實驗」に批判してある。何處かの雑誌で誰かが之の純粹詩の解釋を辭書を引いたりして、精神的純粹性のやうに誤解してゐたが、これは本質的に分析的の觀念であるから一應の注意を促して置く。

註二 「詩の原理と實驗」中の「形式主義の危險性」。

註三、六 T. S. Eliot — *Selected Essays* 中の「歴史的意識と人格の消滅」。

註四 「詩の原理と實驗」中の「形態の概念」。

註五 *Tradition and Experiment in Present-day Literature* 中の Edith Sitwell (エディス・シットウェル)の「詩の實驗」のエッセイ。「詩の原理と實驗」中に紹介して置いた。

現代詩に關するノオト

濱 名 興 志 春

Ⅲ

一般にあらでいふ工場詩ないし社會層を反映したところの今日の今日のシュウル、レアリズムは、コムニズムへの進展なしには考へられない。詩の傳統(思想もさうであるが)は古い半宗教的信念を喪失すると純粹に物質的のものに歸着する。しかしながら詩が純粹に物質的——政治的——歴史的な信念をもつ間は通常、世界的歴史的にみても明かなやうに、ごく期間がみづかい。コムニズムが政治的ひろがりをもつと否とに拘らず、コムニズムの詩は恐らくそれから喬くとびさらねばならない。つまり燃焼がつねに作用しなければならぬ。何故なら、ある詩は一般庶民の政治的信念に影響を與へるにしても、あらゆる藝術の根源たる詩の意義は所詮、藝術の性狀にむかふ運命におかれてをり、隨つて詩の恒久的目的は政治それ自体ではないことは自明であらう。現代詩の政治的各部门に於ける偏見は眞の poetic convention の生誕に尠からず障礙物であるにちがひない。なぜなら、かういふ詩的傳統は政治的形式やアイデアよりも、更に意義深いインテンシティの水準によつて revolution されつつ醗酵自解作用するからである。即ち「今日に於ける詩の實現は、考へられた世界を考へることである。現實の諸想から離れることではなく、それに適合しながら、世界を新らしくみなほすことである」(阪本越郎氏「純粹詩」創刊號十一頁といふようなところに根ざしてゐるとはいへ、現代詩のなかで T. S. Eliot 氏および W. O. Wauden 氏のある作には身をもつて、この標識より發したものは殆どないといつても過言ではなからう。その後に將來さるべき

普通なるあたらしい詩的傳統は、この複雑な化合体を組成する二者を歸納的によりよく判斷し、統制し、醇化してひとつの要素となるべきである、とはいふものの、今日のアルティスト——信念をもつアルティスト、單なる個人主義的アナキストではないアルティスト——がまつたく現在にのみ生きることは殆ど不可能なのである。何故なら、現在にはあまりに混沌たるものであるから、もしぼくたちが信念を、また歴史觀をでさへ欲するなら、ぼくたちは向きなほつて過去へ還つてゆくか、でなければ *imagination* をある程度まで働かせてアイデアに生きなければならぬことに當然なつてくる。とステイヴィン・スペンダ氏自身もいつてゐる。

ここでひとまず翻つて考へてみると、現代のごとき總ゆるものが錯綜し、變革されんとする一時期の環境においては一應、尤もであると頷ける點がおほいではあるが、少くとも社會の各部門における事物の相對性と現象の繼續性とを信じ、その複雑多岐にわたる社會のもうひとつの實現、現實を越えたもうひとつの實在に根ざしたところから、のつびきならずして立ちあがつてくるだけの鞏固な地盤をもち、ぬくもりをもち、そこからたちのぼる燃焼でなければならぬのである。さういふ風ないくつかの困難な峠を経てこそ甫めて達せられるのである。また現今のごとき、ある意味で獨善的ヘドニズムの惡風が現詩壇をわがものがほに風靡してゐる最惡の場合、これはまつたく容易な業ではないであらう。かゝる時に於て誰がその金鑛試掘に着手するか。聊か心寒い想ひがする。これは社會共通の擴汎な世界觀を把握し、かたき信念なしには成就し難いものである。——一部有力なる少壯詩論家の叫ぶがごとく、詩は現状の不振狀態にある。といふことは多言の必要のない周知の事實であらう。とにかく、これが豫見され、實驗されるまへに時變下における急迫した社會は根本的に變革されねばならぬであらうし、かういふ稀有の變動期における詩人の使命について、阪本越郎氏、神保光太郎氏などによつてゆくりなくも摘出されつつあるが、洵に慎重に再考するの餘地も十二分にあるとおもふ。

ここに長々舌を費し、新興英詩の樞軸を形成するものをピツクアップし、鳥瞰援用して論述をすすめてきたのではあるが、その結びつけに鳥渡、溯つて考へてみても解るとほり、この邦の英文學者たちの不撓の攻究、啓蒙紹介が與つてよき推進力たり得たとおもふ。といふのは、佛文科出の詩人の多くが、近時ともすればデイレツタニテイズムの自慰的趣味性への消極的傾向を辿つて、進取の氣象に缺けてゐた點にも據るであらう。——これは我田引水でも何でもない。現にイギリスのエスプリ・ヌボオのシチュアシオンそのものは、その邦の時代に即してフランスのそれらの營養素を巧妙に攝取し、あるひは逆用的に利用して、今日への生長繁榮を贏ち得たといふも決して過言に失するの怖れはない。が、なほその思想、形態を綿密に比較検討するなれば、そこでは、しばしばオリヂナリテが微粒子的であり、ときには缺如してゐることに氣づくのである。強ひていへば、恐らくそれは「虎を畫きて狗に類す」にひとしい。まして身をもつて現代社會の肺腑を扶け、文化の苦悶の眞只中にたつてゐないことが指摘され得よう。

要約すれば、時代の新風俗をただ單に側面から描くへボ畫家のごときメタモルフォズされたコステユムだけでは、そこにいくばくの迫眞力が、宇宙を想像するところの實在性があるであらうか。ビルロン主義的言ひ草ではないが、洵に疑はしいのである。所詮、現代詩の方法にしたがひ、惻しむべき愚鈍をもつて書くなれば、これは惻しむべき愚鈍に屬するものである。もはや容赦はない。まして現代詩人が、言葉の眞の意義に對して無智であり、又あはれむべき離をつくり、その特殊族に屬するなれば、シュウルレアリズムの實踐は甚だおぼつかなく、無智以外の何ものでもあり得ない。——不完全きはまる勞作を決して僕たちに御覽にいれ給ふな。といへば諸君は、鳥渡まで！と手を擧げ『それは日本人の早急さといふものだ。僕らはむしろ無意識の裡に下手にかくさうしていちど現實をすつかりバラバラに解體して、それからゆる／＼自分の創造的流儀で再組織するのだ。そ

それは恰も畫家が、彩色物と色彩と構圖との替りに文學に依據して變形術するのだよ。しかもかういふ變形に耐えることの出来る現實のみが、僕らのエスプリのシチュアションを變化させるにたるのですよ」と。——それも史的詩論として一應はよからう、と、筆者はそれを遮つて、「現實において最も離れ合つてゐる——、まあいへば徑庭してゐるふたつの事象も、結合される巧妙な一撃によつて、そこに思ひがけぬ微妙なハアモニイも生じようしかしその不可解なるイマデナティヴや不可見なるヴィジョンを形成しつつ、しかもそれをこの邦のインテリゲンツィア一般の眼近かな場所に持ちきたらすに充分なユニークとタランを君は所有するか、それがまた尠くとも眼にみえるところに位置するやう形象され得るならば、僕は君の傑出した偉大さ、狷介さを喝采もしよう、が、現在、君の詩作品からさういふものは第三者には微塵もみうけられないばかりか、奇妙なテクニツクやレトリツクの煙墓語にかくれるのは最も野卑でもあり、更に凡庸のそしりを享けても仕方がないだらう」といつた。ところが、まだ自説を擁つて省やるの氣配もなかつた。かういふ徒輩は無意識が詩において重要性をおびてゐるかのやうに誤認し、混亂させ、みづから袋小路に追ひ込まれて、意識的活動の新秩序の面をかへりみず、パラノイアの謔言に始終して、傳達不可能に誘導した罪はちつとも御存知ないらしい。——主客をぜつした絶對性（純粹性）を眞に追究するのであればまだしも、未熟な自己流の技術ないしレトリツクの末節にのみ腐心して、生命なき貝殻詩人であることを御存知ないのは、どこまでも自稱前衛的詩人とはお芽出たき稟質を有つてゐらつしやる。と、痛感せざるを得なかつた。彼等徒輩には當面の打開は稍々困難事であらう。しかし、詩壇のさうした悪いシチュアションを慷慨するまへに、すでに想はぬところから眞にあたらしいといふにふさはしい詩人の出發の聲が揚つてきてはゐる。が、それは限られた紙幅の都合で、縷々敷衍することは暫らく措くとしても、これはひとり英詩においてのみではなく、この邦の現代詩を精密に点検してみるならば、そこには、前に挿話的に實證したや

うな現象がいくつも採りあげられるであらう。右について他の章でも、しばしば繰返し論述したのではあるが、皮層的な西歐精神、形態のみを何等の時代的必然性の反映もなく、また充分な咀嚼もせずして、そのまま嚙下するから、詩的細胞組織や機能障碍や消化不良をおこし、貧血症狀を呈して自滅して了ふよりほか術もなくなるのである。かういふ唾棄すべき缺點は一體どういふところに基因してゐるのであらうか。それは新日本の詩人としての自覺をもたず、氣候、風土を異にする生活環境などをまつたく度外視して、とりとめもなく徒らに西歐のそれらの模倣をもつてことたりとなし、あまつさへ黨派をくみ、明けても晩れても、性も懲りずに、空虚なる反動をもつてこととし、良識あるわかき詩人を威嚇してゐるからである。その盲人蛇に愧ぢず、といった風な無謀大膽ぶり、輕卒さには、この邦のインテリゲンツィア一般をして啞然とさせるのである。この場合「青は藍より出でて、藍より青し」といふ好箇な手垢のついた言葉が端的に現はしてゐるごとく、日本の傳統をふかく研鑽し知悉してこそ始めてその傳統を破つて、眞箇の新らしい壓力のある一つのを創見し、築きあげることができるのである。——でなければ結局、作品は空中樓閣のやうに宙に泛き、聖夢のなかの實らぬ無花果となりおはり、却つて世の噴飯を買ふばかりである。

今日おほくの詩人が、詩の不遇を嘆くまへに、まづその詩人自身の周圍をふりかへり、詩人みづからの襟を正すべきである。

ともあれ、詩は畢竟するところ、政治的思想ないし物質的理念的なものに、シニカルに身をゆだねべきものではなく、むしろ孰れの時代にも、最惡の條件にも抗して文明的な事象に即した客觀性をたえず緊密に結びつけながら、飽くまで詩せなければ居れぬノイザハリヒの振幅をもち、あくまでも明確な合目的な迫眞にともなつて行はれる科學性に依據して、複雑な機械文明の様相なり、その神隨なりにふれて、衝動を感じる擇ばれた少數の詩

人によつて、のつびきならずして書きつづけてゆかれるであらう。

要するに、言葉は詩人の小さいブライヴェイトの間にとりかはされる呪文や獨專的イマデナデヴではない。まして社會機構が、昏迷の藪のなかに陥りたる際、鞏固なる信念、確固たる詩論なき盲目的謔語性的詩人は、それにとまひ、餘儀なく時代の波にまなまとのせられ、はかなき踊りに狂奔するといふ一時期であるにせよ、また知性のひらめきにあるにせよ、それは詩人があまりに憑りどころもなく飛躍しすぎ、思ひのまゝに濫用できる私有財産ではなかつた筈である。

極言すれば、言葉あるひは思想感情は萬人のものである。——最も博學爛眼なる詩人は語彙機能の民族的、集團的性質をして、詩の思考に参加させるだけのある地点までひきあげて、育て、いつてやらうといふ程の抱擁力があり、雅量があつて然るべきではなからうか。苟くも今日の彼我の文化を背負つて立つほどの詩人は當然その義務があるであらうし、また焦眉の急ではなからうか。随つて詩人は共同体への要求の言葉ないし思想感情を包摂し、渾然ひとつの藝術的醇化作用をもつて方法づけらるべき必要も招じてくるであらう。もしも詩人が、誤診した全体觀を眞の世界觀とまつた同一のものと看做して、同國人の慣用語から舶來の特殊な慣用語をもつて方法づけ、語の意義と感覺的觀念聯合とを詩のイズム方向に向つて勝手氣儘に變へてもよいと矜持し、自負するならば、この邦の詩の將來のためにもつと慎重な態度で臨んで欲しいものである。惜むらくは、さうではなく出鱈目の語に始終するのであつてみれば、ミュウズは詩人の眼にあまるこの倨傲と不信とに對して、もはや我慢が出来ないとおつしやるであらう。かくてミュウズはミュウズの部隊長に命じ、近代的精銳なる武器もて攻戦し、その欺瞞にみちた砦を陥落させられるであらう。何故なら、ミュウズは作今かういふ似非詩人の白晝横行にははなはだしく御氣嫌をそこねてゐらつしやるから。……

——あまりにもその奇矯醜態ぶりに愛想づかしをなされたに違ひない。——(未完)——
〔註〕 1は八大阪詩人ノ第九輯へ、2は八神戸詩人ノ第五冊へ發表せり。

純 粹 詩 論

ボウル・ヴァレリイ

純粹詩といふ語句を中心として社會(最も貴重で亦最も無用な現象の社會を指すのであるが)に喧しい議論が惹起された。この議論には私も多少の責任がある。嘗て數年前、私は一友人の詩集のために序文を書いた、その中で私はこの語句に余り重要性も附加せず、亦詩に關心を抱く多くの精神がこの事から如何なる歸結を發見するかといふ事なども何ら豫測しないで不用意に使用したのであつた。この語句が何を意味するものであるかといふことを能く私は了解してゐたものの、これが文學愛好者間にこのやうな反響や反應を惹き起さうとは夢にも知らなかつた。私は唯一つの事實に留意しようと考えたのみで、一つの理論を指示しようとか又は一教科を定義し、それに普遍化しないものを異端者扱ひにしようなどは毛頭思つて居なかつた。私の眼には次のやうに見える。すべての書かれた作品、すべての言語作品(これについては後に検討するのであるが、此處では假りに詩的と稱して置く)には、そのやうな多くの固有性を與へられた或る斷片、又は識別し得る要素を含有してゐると。言葉が思想の最も直接的な、即ち最も非感情的な表現との間にある距離を顯す度毎に、この距離が純粹に現實の世界とは別個の諸關係の世界を或る程度にまで豫感させる度毎に、吾々はこの例外の領土を多少に拘らず擴大し得る

可能性を明かに抱藏する、更に恐らくは發展と成養とを受け得べき貴重な生々しい一實體の斷片を捕捉し得るかの如き感を抱くのである。尙、この實體が發展し活用されて藝術の效果としての詩を形成するのである。

このやうに明瞭に識別し得る之らの要素と私が非、感情的、と稱した語句の要素とは、かくの如く判斷と相異なる諸要素を駆使して一つの完全な作品を形成し得るといふこと、それに一方では吾々の觀念と心象と、他方では吾々の表現手法との間の相交、的な關係の全き一体系といふこと——その印象を韻文又は非韻文の作品形式を使つて與へることが出来るかどうか——これが大まかなながら純粹詩の問題である。私は純粹といふ語句を物理學者が水と稱ぶと同様の意味にとる。このことは非詩的な多くの要素を混淆せぬ作品を一篇たりとも人は作り得るかどうかといふやうな問題がそこに提出されることを意味してゐる。私が不斷に在來考へ、そして今もなほ考へてゐるところであるが、これは到達することは不可能な一指標であつて、詩は不斷に之の純粹な理想的狀態に接近するための一努力である。つまり一般に人が一詩篇と稱してゐるものは、事實は一言語中の素材のなかに象嵌された純粹詩の斷片から成立つてゐるものである。非常に美しい一詩句は詩の極めて純粹な一要素である。一般に美しい詩句を一個のダイヤモンドに比較してゐるのは、この純粹性といふ性質の感情が、すべての精神の中に存在することを示してゐるものである。(註)

この純粹詩といふ語の用法は不便である。私の純粹詩の觀念は之とは反對であつて、本質的に分析的の觀念である。純粹詩とは何であるか、それは一般に謂ふ詩篇なるものに對する吾々の觀念を明確にし、言語の人間に顯はれる効果と言語との多くの様体に於ける關係の困難にして重要な考究にあつて吾々を導くに必要な觀察から演繹された一虚構である。或はこれは純粹詩と稱ぶよりも絶對詩と稱んだ方が妥當であるかも知れない。そしてこれは語句の諸關係から歸結する効果の探求といふやうな意味にも解すべきであらう。要するに、その言語に依つ

て支配される感性の全領域の探求といふことを暗示するものである。この探求は頗る困難ではあるが探り得ることが出来る。そのことは一般に行はれてゐるのであるが、他日之が組織的に誘導され得ることも決して不可能ではない。(『La Poésie pure』 M・K・譯)

註 「一詩篇の價值は、その詩が有つてゐる純粹詩、即ち特異なる眞實、全く無用な領域の完き適應、存在しないやうなものの出生に於ける明瞭なそして迫力ある蓋然性に係るのである。」(詩人の手帳)

詩の難解と哲學詩人 (假題)

T・S・エリオット

假りに詩の主潮が嘗て形而上學的詩人達へ一直線に下流したごとく、彼等から流れ下つたとすれば、彼等の運命は如何であつたらうかと吾々は尋ねるかも知れないのである。恐らく彼等は形而上學的詩人としては分類されなかつたであらう。詩人の所有する興味は無限である。知的であればある程詩人は愈々向上するのである。知的であればある程一層詩人は多くの興味を所有するに到るであらう。吾々の唯一の金條は詩人がその興味を詩化する事に懸つてゐるのであつて、その興味をして唯詩的な冥想に耽らしめることではない。詩の裡に浸入した哲學的理論は立派に成立し得る、何故ならば、或る意味に於ては、その理論の眞偽正誤等は問題にはならぬのである。亦ある意味に於ては、その理論の正であることは證明され得るのである。問題にされる詩人達は他の詩人

達と同様に多くの缺点を所有してゐる。乍然、彼等はその最善の場合にあつて、理性と感情の状態のための言語上の均等量を發見せんと没頭した。更に、これは彼等が誰よりも一層圓熟してゐたことと、彼等に劣らぬ才能を有する後世の詩人達よりも以上に彼等が確乎としてゐたことをも意味するものである。

詩人が哲學や或はその他の何かの問題に興味を抱くべきであるといふことは永久に必須なことではない。實際現象的に謂つて、現在あるが如き吾々の文明の裡に生活する詩人は、むしろ難解であるべきだと吾々は斷言し得るのみである。吾々の文明は著しい多様性と複雑性とを包含してゐるのだ。そしてこの多様性と複雑性とは詩人のデリケートな感受性に反應し、そこに多くの様態に於ける複雑な結果となつて顯はれて來るべき筈である。詩人は言葉を自由自在に使ひ、必要に応じては言葉の順序を變へて迄も自らの意圖するものに與へ使ふために、愈々包括的に、暗示的に、更に間接的にならなければならぬ筈である。(必ずしも、それに相關聯させる必要はないのであるが、この意見に就いての華々しい聲明はジャン・エプステン(Jean Epstein)氏の宣言、「今日の詩」La Poésie d'aujourd'huiである。その中から、吾々は奇想に近似すると考へられる或るものを感じする——事實、吾々は以外にも「形而上學的詩人達」の手法に似た手法を——その朦朧化された言葉と單純化された修辭の用法とに於ても甚だ近似した詩法を感じすることが出来るのである。

おゝ、透明なゼラニウム よき魔術の戰士

偏狂の瀆神者！

覆裝 鐵皮面 射水器！

おゝ、偉大なる夜の葡萄壓搾機

ねぢ込まれた産着

森の奥なる仙蜜針花！

輸血 復讐

産後の感謝の祈 壓着布と永遠の衣服

御告の祈！ 結婚の破壊

すでに結婚の破壊は出來ぬ！

(註)

同氏は亦單純に書くことも可能であつた。

彼女は遙か杳くにあつて 泣き^{なみ}くれてゐる

烈しい風もまた 悲しみ^{かな}くれてゐる

(註)

ジウル・ラフォオルグ(Jules Laforgue)と、トリスタン・コルビエール(Tristan Corbière)の幾多の詩とは近代の英詩人の誰よりも「ダンの流派」に近似してゐる。しかし彼等以上に古典主義的である詩人達は、觀念を感情に迄變質さす——觀念を精神状態に迄變形させる——處の同じやうな根原的な特質を所有してゐる。

カードとスタンプを好む幼兒のために

宇宙もその兒の偉大な食欲にそなへる

あゝ ランプの光に顯はれる世界の小さき態^{まゝ}よ！

回想の冬青に顯はれる世界の小さき態よ！

佛蘭西文學に於ける第十七世紀の偉大な文豪——ラシイヌ——と第十九世紀の偉大な文豪——ボウドレイル——とは他の何人よりも相近似してゐる。この二人は用語手法の最大な心理學者である。わが英語の最も偉大な用語法の文豪の二人はミルトンとドライデンで、この二人は、人をして眩惑せしむるまでも靈魂を無視し誇示してゐる。このことは彼等にとつて幸か不幸かと考慮することは興味ある問題である。假りにミルトンやドライデンの如き詩人達が屬出したとしても、吾々は大した期待を得ることは出来なかつたであらう。乍然、事實に顯れた如く、英詩が極めて不完全な形態のまゝで其の殘骸を晒したといふことは遺憾である。ミルトン又はドライデンの「技巧の性癖」に反對する人々は、時折、吾々に「吾人の心内を透視して描け」と謂ふ。しかしそれは完全に洞察透視する事にはならないのだ。ラシイヌ又はダンは心内のそれよりも更に多くのものを透視し得てゐる。人は宜しく腦髓の外膜と神經系統と消化器管とを透視すべきである。

若しそのやうであるならば、ダン、クラアショウ、ヴォウン、ハアバアド、ハアバアト卿、マアヴェル、キング、また最善の状態に於けるカウリイは英詩の一直線の主潮内に存在してゐる。更に彼等の缺点是考古學者的な愛情に依つて優遇されるよりは、寧ろこの基準によつて非難さるべきであると吾々は結論しても宜いのではないか。これらの詩人達は「形而上學的」であり、「機智的」であり、更に「奇妙」、「曖昧」でもある理由のために、彼等が最善の状態に於て他の眞摯な詩人達と同様に之等の屬性を所有してゐないとは謂ふものの、暗黙の限度がある言葉で以て過大に賞揚されたのである。

扱て一方に於て、吾々はジョンソン（見解の相違せる危険人）の批評、それを精讀せずして——ジョンソン式

の趣味の基準を消化せずして——放棄すべきではない。ジョンソンのカウリイ論の有名な一節を讀み、そこに吾々は彼が機智で以て、現在吾々が意圖してゐるものより以上の眞摯な何者かを明示してゐる事を忘却してはならない。それらの詩人達の韻律法に就いてのジョンソンの批評に於て、吾々は彼が如何に狭い範圍の影響の裡にあつて訓練されてゐたかを忘却してはならない。吾々はジョンソンが、その反則主犯者カウリイとクリイヴランドとを最も攻撃してゐることを忘却してはならない。ジョンソンの分類を放棄して（何故なら、それ以後には一つの分類も存在しなかつたから）更にダンの壯重な音樂より、オウリアン・タウンズエンドの仄かなちりんちんの快音に到るまでの、これらの詩人達の種類と程度のあらゆる相差を明かに顯はすことは慎に有爲な仕事、内容の確乎とした文献を必須とする仕事である——そのタウンズエンドの「巡禮と時間との對話」は、この秀れた詩集から惜しくも除外された少數の詩篇の中のひとつとなつてゐるものである。（"Selected Essays"「形而上學的詩人」M・K・抄譯）

註 「第十七世紀の形而上學的抒情詩と詩篇」（ダンからバットトラアまで）

肉 体 出 發

竹 内

一

汽車を降りたら 汽車の匂ひがした 汽車のにほひのなかで
汽車を待ちながら きみを想ふてゐた

きみのすき透る身体を通して 私の行く途がある

きみに逢はなかつたまでの遠い日

雨の日は亂雑な思ひを平行なきみの視線にまとめようとした
いろいろなことがすべて片付き、新しい落着き

新しい途がひらける

私の足がへ私の手の様にVはたらけばよい
私の心もへ私の手の様にVしつかときみの原色を抱きしめる

新しい落着き 區切られた私の領域で

腐敗した六月の雷鳴の様な胸さわぎがする

ふてぶてしい皮膚の反撥の強靱な

きみの皮膚には ニワトリが居た

白いニワトリが生毛の様にちくりちくり

私の胸をついばむのだ

白いニワトリはまた兎に似てゐた

柔軟なスビードを持つたちつちやい有機体

今 スタートする肉体

爪先から灼熱して傳はる情火 ほのぼのと あんなに憎んでゐた顔 正面か
らじつと見てゐて ところ靜かになる

春 へ の 組 曲

川 口 敏 男

レスビアの果實は空にひかつて

ひとすぢの思念へ烈しい水がながれてきた

ひかりが薺とかこんだ

じつとしてゐた

青い肋木が光りのむかふに游いで

山百合の匂ひがたちこめた
にほひにつれて
指の間へながれてくる白い港
光りをいつぱいに吸つく孕れる道
幼いころのサアカスの天幕がほのしろく地をおほひ
海のひびきが百合を飼ふ
虹がたち
砂にうきでるまぼろしに
ふと呼べばおともなく消えていく
しろい優しい花の手よ
卓にほのかなフリイジャの三つの蕊を頬にあて
星のしづかな霧の日に
あなたの瞳はよみがへり
ふと把らふ虹のいろ
空のおもひよ
花の聲
湖ちかくかすかに顫えるひとすぢの
歌の日記に灯をともし

丘

1

柴

俊

介

白いホテル。

丘を彩る美しい白鳥である。

パイプのけむりが立上り、

その叢の話聲にふれる。

青赤白の植物よ。

風に這ふ昆虫よ。

丘の少女がかむつた帽子に太陽を投げる。

花サボテンのとげは一つのスクヤングルを教へる。

植込を小徑が潜る。白いベンチは次の季節を眠る。

少女の囁きが冷くひびき、

歪を見せて、花辨がかすかにゆれる。

尖塔に時間が地味な悲しみを蘇生する。

少女の奏でるドンファン歌曲。動かない花籠。花を蹴る蝶の秘密。
麗しい總ての窓でピアノと天使は接吻をかざす。

呼鈴を押す暴君。

赤い赤酒がスリツパの中央を失くする。

少女は反れ曲つてホテルを汚す。

一つの椅子。悪魔は焦燥に落ちる。

ホテルを運ぶ少女の白服。

ミルク色の藤椅子にひろがる一枚の作圖。

ハコア・ナフキン。

ハ美しい飢餓。

ハ果物・白い夢。

卑俗な神話が切なくあふれ、

少女のオペラは歩行する。

丘の窓窓を盗み――。

光の絨緞。

空は透明なる線畫。

圓らかな童話は背伸びして、

少女の口笛に、躓く。

タイルの門標は白い衣を展げ、

童子は寝轉んで少女の指に誇らしく絡みつく。

昔。日溜りに膨れた丘の傳説。

少女は小さな聲を叫んで、

芝生のかげに足をタクトする。

――空間を塗る抒情の白。

――晴れた香料のアルバム。

小羊の白骨は丘の毛波にくすれる。

芝生の門に緑の影の群立のみなぎり。

春への歌

疲れの吾を襲はんとならば、なほせめて吾は高きに於てあらん。

ハンマ・カロツサ

池田日呂志

ときには あはく
かなしげに
そして うれしげに
風の眠りもやらぬ ひいさやぎよ
わが胸 おもひほのぼのと花に充ち
とほく かすかに
陽に透く雲の翼にまぎれる。
あゝ神は好ましく
木梢は雨に洗はれ
胡桃の苑にも くだりて
滑らかに悶ゆる 白い光りよ。
美はしく、 あゝ美はしく

掌よ わが頬に
揺れては かへる 季節のあはひ。
ときには くらく
かなしげに
そして うれしげに
とどめもあえぬ 雲の流れよ、
わが聲は黄昏の蔭にも眠りて
とほく はるかに
ナルダは青く風の匂ひに濡れる。
あゝ神は好ましく
木の果は雨に洗はれ
うしなへる 總べてのものに
やさしげに悶ゆる 白い光りよ。
美はしく あゝ美はしく
掌よ わが頬に
揺れては かへる 季節のあはひ。

地

上

葛井和雄

泥沼に這ひ暮すこの貝族
いま暗い隠花植物の中に
蓋閉ぢて、
爐邊低く 洋燈を吊し
疲れたる晝の女 座らせ
ぽつかりと筵に
アイヌ族の如く影据ゑし男
たゞわけあるを知らず
土ある故に生きるべし
幸福なりと言ふ

昭和十四年一月廿八日

聖

夜

油燈の下^{もと} こゝに古ぼけた黒皮の聖書開かれ
煤けた自在に絡んで
凝然光つてゐる六つの眼^{まなこ}青

節くれた指のある膝より
音讀の創世記 零れ落ち

東亞の島の一家族
今宵 聖夜にして
外に闇の地球が しづかな自轉をつづけてゐる

昭和十四年一月十八日

私 信

樺
澤
友
佳

樹林をこえ 湖をこえれば
ひようひようと 射ぬいてゆく
銀矢があるのだ
地平の一点の 山脈をめざして

私は生きてゐねばならぬ
明日の現實のために

夕映えが空に にじむで
私の愛情も 空ににじんで

街路樹の影が みなぎつて

私をとりまき 唄へうたへとせまるのだ

でもそんなのは私は知らぬ

逃げた夢なら私は知らぬ

私の聲帯は破れ切つてゐる
追憶の傷口の奥で

私はもううたへないのだ

冬の時間が近いから

私は屋根の修理しよう

星が見えるのは あばら屋であると

書斎の窓は閉めよう

むかしの捨て犬が戻つて来るから

泣いてる こほろぎはそのまゝおき

馬鈴薯を卓へかざらう

凋んだ挿花は潔く捨てよう

パンは昨日のかけらでいゝ。

北方集

奥

保

雪の道、ひとすぢ朱く、照るに
櫓も、唄も、人もなき野の……

こゝにめぐりて、冷えの氣流は、
銕くもかわす、猶 北の方へ。

北
方

雪の丘、吹き走る
櫓もあれかし。

ふるさとの眞冬、
赫々とさむく……

雪ざさのみぢか日。音あげて、
走りくる、微。

雪の丘のふるさとに、
火にやくる鳥を希める。

思
慕

ふる雪の、積む
標に。

慈愛ふかき、婦を
かのひとを。

冬は環りて。雪明り
なづめる、

一杭、ひとくゝ、
積むは、鎖ゆる證しに。

標
空

大塩の海岸にて

西山五百枝

カーン カーン カーン カーン カーン
カーン カーン カーン カーン

石工達は天壁に立つて
平凡な鈍音と世間話の間に
その海に連なる山を割つて居る

傾走 罅隙 浸蝕 風化
あらはにされた大地の節理は
いま薫風の天空に向つて染まる
壘積した幾億年の岩盤が
初めて馥郁たる海風を満喫する
壁端のスパークに天譔を捲起す。

美しき七月に

奈良進

君等多くの似而非詩人は
夜毎蟹のあぶくで化粧して
センチメンタルな月を華やかに讃美し
梟の哀しさを密かにかなしむのである
そしてそれが君等の
現實への素晴しき闘争ストライクなのであらう
が君等よ

ふるびた針でレコードをかけるのはよしだがいい
音楽は君等の頭蓋骨を粉碎するに役立つのみだ
少しばかり残つた頭髪を自慢さうにいぢくるよりは
せきせきと流れる朝霧に頬をさらせよ
しんに Poetical なものは

君等の生活に爽やかな弾力を促すであらう

へ頼癡の中で妥協するのは愚かな老人の仕事である
へ戦争は遅しく破壊し遅しく建設することのみ意義をもつ
君等よ慌てず試みに見給へ
緑の空間をゆさぶる彼女の足どりを
そしてききたまへ彼女の口笛を
粉飾された凡てにまして彼女は疾驅し駈けあがり
夢に滑れてさんらんと墜落する星屑を掃き捨てるのである
おお彼女を美しき七月に署名する一人とせよ
青年技師の透明な邪心は
既に Pamir の高原に向つて羽搏かれた

• 1938 •

移民地にて

渡邊和郎

訓練所の土壁の影に凭れてゐると、
星が松花江の畔で鋭く青味を帯びてまたゝいた。

晝間みた大きな犬が北辰に向つて吠え、
泥の街の斷ち截たれたところで幽かに明るく灯が點つた。
あれは日本の空だ。

赤痢で登れた拓士たちも彌榮病院の窓からぢつとみつめてゐることだらう。
土の匂ひのする稗飯を喰つた。

薄い溜りの汗にランプの灯が映り、

何も言ふまいと心に言ひきかせて嚙みくだきつつすゝつた。

高梁であまれたアンペラの上からベチカに向つてゐると、

二重窓の外では北疆の夜がひし／＼と冷えてゐる。

明日の準備にごろごろと濁つた水を沸す。

すると清らかな民族に流れてゐる血のやうに、

新らしい響きが部屋中をふるはせた。

旅順詩帖

空と海光との間から、
くる／＼と煙のやうな輪がひろがつてくる。
渤海のひろ／＼とした潮みずの輝き。

昨日の雨で濡れた表忠塔の下で、
陽を浴びながらちつと海神をみてゐる。

不用意にも私たちはこんな幻覺をおこしてゐたかも知れない。
くるく舞つてゐる空輪の涯で、

血にまみれて狂つてゐる哀れな姑娘のこと、
すがくしい風になびいてゐる日章旗と、

強い兵隊さんのことなどを。

それから砲煙の中で、ゆつと現れた露兵の青太い骨格。

いま、眼下にひろがつてゐる袋のやうな軍港は、
いろく新しい思想を孕んでゐる。

表忠塔のみが空高く、

靜かに眼を醒し、靜かに眼を瞑じてゐる姿だ。

戦ひのために腐りつつある血の匂ひが、

渤海の潮風にまじつて吹きつけてゐる。

いつさいの歴史の震源地だ、と構えたやうに、

アカシヤに映える旅順の街は靜かさの中にあつた。

青インクの會話

小林正純

バラの追憶は何頃か白蠟の中に溶け込んだつけ
青い海に地震があつても燈台の灯は消えないね

穹の灰雲は何故晩鐘カリイモンの音を探すのだ

御覽なさい

山から子供達は、どんぐり目をして

スキーして歸るでせう

黒眼鏡のプレー・シヤズよ

まあ腰掛け給へ

僕はセザンヌを講義致しませう

床間にある人形の形態學はね

一九〇〇年頃騎馬試合に熱狂したガルソンヌと云わうか

美しい糸のやうな人間性はリラ印の目醒時計が知つてます
さて僕は頭髮にブラシュをかけねばなるまい

白日三題

ガウン

渡邊 曠彦

このおののきは、わたしのものだ、カネーシユンの幻く、まひるまのほのほが、うすものにくぐる風のたはむれか、じつとして、すましかへつた、ひめたいきづかひは、わたしとあなたのものなのです。

いつはりの世に怖ぢて、あなたはあづおづと貌をだす、霽れたひとみのそこに逆轉した風景、あへぐくちびる、わたしは花瓣にふれる蝶のみこなして、聴診器よりもたしかに、あなたのむねの丘にのぼる。

わたしの一日は彈道をひへて、頂上にともつた灯よ、灯はあなたのつぼみだ、ふくらんでゆくのだ、わたしは七彩のガウンにととのへて、このひとときをまもる、たのしくつらくまもる。

眼醒め

ひかる數粒の水は、ゆめを叩^{たた}へてかけた驟雨のきをく、滾滾とみちてくる濡れたひかり、白いシートに私のめざめ、ラヂオは軽く、ゆたかに鍵盤

をはちく。

ぬくぬくと四肢をながして、けふはじめての聲をだす、忘れてゐたすこやかないとなみ、はやばやとわたる雲に、この溢れたのだみの挨拶をかはさう。

雨のしみた壁のあちこちに、書きちらされたたつきのあとをけして、A B Cとまた書きはじめようか、靜脈のうへた腕に、みたまへけさは盛りあがる肉塊を。

窓をひらけ、ここをひらけ、はるかな宏いそらへ、はなやかでよい生活へ。

さあ、この充實の一ときを、戦地の書翰へ射じよう。

たより

——ロソクの灯でこの手紙を書いてゐます。——
あなたの意吹きに頬をうたれて、わたしはしばらくたちどまる。あかる

いひかりに埋もれて、きびしい星辰をうつした戦闘帽をまさぐれば、あなたの荒れた掌が、いまわたしの心臓をあたためます。

昇 天

堀 口 太 平

新らしい切通しの真中に、私は小さな渦風の様に立つてゐる。白い熱線の中に空低く椿の一輪が揺れ乍ら漂つて居たが、それが今呆けて消える。

カーと暑く、私は何度も空に向つてく・し・や・みをしてゐると、誤つて火災報知器のボタンを押した様に、戸惑ひして出て來た自棄の心と私は鉢合せをして、いたく困亂し、ワンワン喚く耳鳴りの中に、長い事埋まつて私は憤つて居る。

崖から道にまで蔓を延ばした晝顔が猾さうな顔に、桃色の蘇が、押賣りする孤兒院の子供の、上の空の顔に、何だか腕時計ばかりに氣を取られ、伸び上つてゐる様に狐のボタンが、切口から澁い乳の出るのが日向葵の様

な浮浪者に、そんな工合に、みんな私の氣持にもたれて來始める。

高い甘い諸島には一本の桐の木が立つて、日影は唯其處だけに、上目使ひをした黒い顔となつて見張りをしてゐる許り。

いつしか私は何もかも排拙してしまひ度くなる

私と云ふものが肛門だけとなり、それが煙草の煙の様な輪となり、伸氣に空に漂つて居るなら……

私は人の子一人居ない此處に來て立つて、植物の様な奴等に見られ乍ら、私といふ人間はもう駄目だと涙ぐみ、この様な昇天を開始する

覺醒の一刻

私は目を据え、手を大きく擴げさへすれば、何處へでも空高く飛翔して行かれる様に思はれてならなかつた。或る覺醒の一刻には……

都會のデッサン

木 下 夕 爾

I

日曜日。―僕は幸福をポケットに入れてある。時時、取出したり又ひっこめたりしながら。磨かれた靴。軽い帽子。僕は獨身もののサラリイマンです。さうして都會よ。君はいつでも新刊書だ。オレンヂエドの風のあとに、見たまへ、あの舗道の上、またもやプラタヌの並木はいつせいに美しい詩を印刷する。爽やかな拍手とともに。

II

百貨店。―エレベエタアよ。氣が向いたら地獄まで墜ちてくれたまへ。天國まで昇つてくれたまへ。―ここは屋上庭園だ。遠い山脈、さうして青空とアド・バルウン。ああ今僕は感じる。あの金網の動物たちよりもつと悲しく、都會よ、君の巨^{おほ}きな掌^{てのひら}に囚^{とら}へられてゐる僕は自身を。

青 嵐

梶 浦 正 之

玻璃^{グレイシグ・シロウ}球台は浮雲と紫陽花の貌を映し
日蔭^{ベイヤ・デラス}棚をぬけてゆくコリー犬を捕へた

冷えた紅茶に沈澱する倦怠を感じる頃
燕は空しく借景の鐵塔を剪つていつた

いつか聰明な腫は曇りはじめ
レコード・リストを滑るあなたの指は止つた

「亞麻色の髪の娘」の聲音はつゞく
印象派の敵は酔ひ痴れて武裝を解く

夕映の金貨は地平にかちかちと飛び
さらに眩しい緑の電撃

あなたの^{まふた}瞼は静かに帳^{とばり}をおろす
脚光に濡れる襪^{ひだ}のそよぎをのこして
美髯と羊齒類の夥しく繁茂する邊り
紳士らは考古學の蘊蓄に余念がなかつた
あなたの探す言葉と皐月^{さつき}花^{はな}の吳須器^{ごそき}を攫^もつて
青嵐は颯爽と發^たつてゆくのであつた

註——グレーシング・グロウプとは洋庭園の中央に配置する玻璃製の魚眼レンズの球臺。浮雲、樹木等
四圍の風物を映す。

ダイヲニサス

Michael Roberts

川口敏男譯

1

汝^{なんぢ}の兩眼は洞穴より黒々と實つてゐる。
汝^{なんぢ}の兩眼は睡眠を匂はす水脈より幽かな青藍を漲
へる。
冥^{くら}い波浪をつたつて翳^{かげ}多い海底へと喪はれる。喪
はれる。幻のやうに限りなく氓はれる。遂にやつ
てきた。ここだ。わたしだ。
ふかい、きびしい精氣だ。靜謐がとりまいてゐる。
あまり深いので私は世界の時^{ツァイト}を喪つたやうだ。
かつて世界の時^{ツァイト}は支へやうのない悲しみであつた。
時の子のふかい、ふかい愛であつた。

私はゐる。
ここには世界の光りとはとどかない。時^{ツァイト}は光りに轉
身するのだ。
汝^{なんぢ}の兩眼の下にふしぎな微光が生れる。それは木
の葉。青い木。青い青い滴りだ。
汝^{なんぢ}の毛髪^{なんぢ}の溺れるやうな妖やかな海藻。毛髪の下
にふしぎな微光がふくれる。
それは空間にない光りだ。
それは思想にない光りだ。
さうだ。思想は一つの行動だ。
微光は成長する。精魂の一元世界だ。
精魂には肉体がない。肉体は時^{ツァイト}だからだ。
時^{ツァイト}。さうだ。それ自身が一つの行動だ。
光り是一个の世界。一つの樹。一つの原子へと轉
身する。

夏日の荒れすさぶ嵐。それが徴候だ。それが宇宙だ。

世界の運動が光りの宇宙を震愕させるのだ。

その世界には形がない。時がない。見えるものか。自我だ。ひとつの鏡が海洋と思想を連ねるのだ。

かつては世界の記憶は支へやうのない悲しみであった。ふかい愛の痛手であった。

2

此處。傾坂の岩に咲く。世紀の畢りの花一つ。

精はなほ息吹く。優しさの愛もなく、かつ自身を満すのだ。

時は溢れてゐる。しかもあらゆる時を超絶して、青い空、青い聰明な空からの答へが齎られるのだ。生きてゐるのだ。世界の極地へ喪滅した探險隊

のやうに、絶望しながら、純粹な昂然たる誇をもつてゐるのだ。つぐなひがない生存に生きてゐるのだ。

あらゆる希待を超えて。さうだ。あらゆる希待こそ、はげしい世界の虚空なのだ。

此處。小さい花が岩に咲く。

此處。青い空に小さな雲が浮く。

此處。私がある。他我と自我とを剪断するところの。

生きてゐるのでなく、更に死んでゐるのでもない。

けれども刻々に現在と未來とをもつてゐるのだ。

時が溢れでる。狭い入口をもつてゐる。

石の世界から、ふかい海底から、かすかなものが生命の根元へ、空へ、木梢へ、のびひろがる。

石は唇づけて頬と頬とをすりあはす。

暗い見えない眸をひそめて、時は一つの小さな流れをひく河。

少年の跳走のやうに。そして布地の帽子に掬ひあげた水滴よりもなほかすかな。

自我がほとんど一つになるやうな最期の光りに汝の静かさは喪はれ、幽寥は擾される。

流れはおもむろに進行する。

碎氷にくだけて小石に私語きながら

岩礁にこだまして力を加へるのだ。

灌木や薄荷の高く匂ふほとりに漂ふひ

牧場の傾斜から忽焉と現れたり、暗いなかからそして、冷たい峡谷から白日の光りのなかへ蘇へり

ふつくらと跳ねまはり、ふとした希みが涌く。

瀧だ。ああ、一瞬にして死滅の世界へ。

3

ああ、わが幻の世界深くへ沈々と溺惑し

海底の未現出の世紀へと游戈す。

石の貌に時につれて消散し、しかも未だ觸れざるものとして炳として存立す。

世紀の英雄が己が死を豫感し、愛するものが愛のおもひに熱するやうに。

海の、雲の、水の、ながれいくものの循環よ。

ながい夜の海にめざめてはこもごもの呼吸。芯の匂ひよ。

わたしは街に飛散するものかなたに死の翳を見石の瞳の死滅のなかで生き生きとしてゐるのをみた。

石に刻れた眞理の光りは

われらが知る世界を啓示す。物質の世界を超えて更に崇美な心のなかに、

しかも、痛みに満ちて、ゆるやかな流れはつづく。

死の形はげしくも、かつ、正確に、

狭い門に生れて、流動する水に生成す。

死の形こそあの丘。生きてゐる石。生命のながれ。そして沈黙のあの丘なのだ。

4

その聲はいつか囁かう。

唇は男によつて、潑刺たる男性の手で切勞かれて

兩つの眼ははつきりと澄み、

言葉の世界のなかにたつたひとつの生きた言葉が生れる、と。

この言葉のふきでるのを私はじつとまつてゐるの

だ。

光る魚族の群のやうに。

影と影との間へ遁げる獸のやうに。

あるいは、夕陽ななめなる頃に、喬い樹に啼く小鳥のやうに。

混亂の渦は烈々とひろがり。最早、羽も見えず、

輝く兩眼の煌燦たる鱗も見えず

豊饒な大空に光りの孕む星座の彼方、

ここにこそ言葉が生まれる。

靜かに、無言のうちに

思想を超へ、言語を絶した一つの崇美の秘域へと

石は語る。啓示は現世に名だに無く、より清く、

より崇きものの去來する彼方、ああいとも至高に、齋らされようとする。

北方の性格

奥

保

私は北方の性格を愛してゐる。其處には誰もが感じられる奇峭な峻嚴さや、緊迫した熱意が波打つてゐるからである。此の地理的な性格は、南方のそれとは全く特異な色合を持つてゐる。同じ夢の襖波にしても、南方のそれには、甘暖な太陽が慈恵し、北方のそれには、寒酸な太陽が當るのである。光は細部に走る寒流であり、濃藍な陰翳が執拗に纏つてゐる。これは、永年北方に居住する者のみが語る意味である。

嘗て私は南方を憧憬してゐた。若い血にはそれが良い同化であり、共鳴者でもあつたのだらう。然し私はそれから何時か思はざる歲月を重ね、星霜の氷河を渡つて、寧ろ寒を厭ふ身であり乍ら、四時、北方を愛し始めた。私は今、絶讃に近い氣持で北方の峻峭な精神を愛してゐる。これは未だ令名、南方に居住を持たぬ私の不見識に依る言葉かも知

知れぬが、宿懣深き雲と霰と、雪と吹雪は、永遠の思索と意志の生活を天與する以外の何者でもない。

北方の象徴は冬である。瑰麗な冬は石と鐵の戦ひよりもより刻明な肉體の戦ひを要望してゐる。此處には總ゆる逡巡は迴避であり、總ゆる不可避は戦ひでなければならぬ。北方の性格は爾く剋しく、きびしいが故に飽く迄も高く、至純にして意氣卷いてゐるのである。私は事上練磨と言ふ言葉を思起す。そして此の事が、寔に、北方の性格そのものであり、事實又、これが北方性の根幹をなす、恒に試練的な火であると思ふ。火は燃ゆる可く孜々として努める。

南方の何處にも見當らない、彼の感度の強い天然の風物は、一見蕭條の感を遣れぬものとしても、其處には一切の放縱な魂の崇高さがある。私は分けても皚白な冬林を過ぐる無限の雲族を愛し、其處では態々な花の如き芳香に還り

来る貧しき青春を咏ふのである。北方と文化、と言ふよりは、北方の文化と言つたものが、そんな原始的な風貌に冴え澄んでゐる。

摩擦面の少い南方に比して荊棘の多い北方の性格には又自らの常套を脱せんとする咆哮がある。此の苦悶は私が嘗て北緯五十度の荒海に遊んだ記憶が充分に證立ててゐる。私は何故、北方をその如くに愛してゐるかを知る。それは思惟の地軸を絶えず縦に貫く、伶俐な知性の一線であるからである、直線上の北方よ、寒い太陽の北方よ。

私の感懐から南方文化の播遷が消ゆると、私は強い自意識に燃え始めた。今、北方は美しい愛の熱情に燃えてゐる。雪花の血は鳴り、埋没の地平線は重濃である。しかも、訪れ来る者は覺音荒く過たす来る。地の息吹き、生命の屈伸此處にも逞しい北方の現實がある。山岳の相剋がそれ、凍河の鬱塞がそれ、人情の朴訥がそれ、犬吠の豫兆がそれ、總てが無爲の如き空位の上に、無限の意味を置くものである。激變と漸進、それ自身は恒に美しい圭角を以て君臨してゐる。今や、北方の文化が明かに南下し、自らその虎視に足る優位を南方の花中に於て光耀せしめつゝある。自家を

出でた偽勸諭的な北方の性格は、強い獨自の瓊光を發つに至つた。

私が言はんとする文學上の北方性とは、かゝる精神の暗示であり、その性格の實踐窮行である。

私は靄感な詩人の多くが、何等かの形に於て寒暖の寒を愛し、極北の美をその何よりの真き要素として作品してゐるのを知る、炎天下の頭蓋にも無極の寒涼を感じ、玉石混淆の中にも一段の強い響引を持たねばならない。此の性格は何を志向するのであらう。論を俟たない。

北方よ。南方の雄たれ。趨勢の歸する處。北方は強く、その城砦は高い。それ自身が文化であり、自然であり、強横である噴上の花々を以て、獻身的な端を努めねばならない。然し、その餘りな強劇の故に、自ら生命を絶つことは愚かである。私達が惜愛することは、さうした知名な詩人の永遠の缺席である。

然し、北方よ南方の王たれ。南方の北方たれ！

△一月下流▽

詩 作 雜 感

渡 邊 曠 彦

何故にかうも激しい粉飾をもたねばならぬのか、と詩集を伏せて、僕は幾度となく嘆息した。はなやかな世界、不思議な世界、痛ましい世などを観ることが出来ても、愉しい世界を知ることができなかったし、そのはなやかさ、痛ましさに、嫌味な誇張があつたりした。これはひねくれ

てゐる私の罪だ、と思ひかへしてもみたのだが……。
ク詩は判らない、といふ人の案外に多いことを思ふと、詩から欣びを得ようとして、失敗した人も亦案外に多いかも知れない。生活そのものである詩が、全ての人に理解されなくともやむを得ない、さは考へながらも、もう少しゆつたりと觸れてゆくことの出来る作品を、と慾張るのである。

縦横に張られた網の目をぼぐしたり、かへ繰つたりして詩人に近寄るまでには、すっかり疲れきつてしまふ。しかもクロスワードを解くような努力の結果、掴んだ正態が饒舌のかげのみであつたとしたら。

私はなるべく簡潔な表現方法を探らうとおもつた。その方が平凡な僕のよるこびを、平凡な儘に曝けだして憾みがない。この場合にすぐれた詩を謳ふと思つたら、自分がすぐれた者になるより他にない。

私は經濟狀態がゆるしたら、時折は旅行して生活といふものを忘れて、ぼんやりすることも良いと思ふ。そのように、詩人も時折は詩を忘れて、ぼんやりする必要があるのではなからうか。

新日本文化のよび聲が、嵐のごとくであるいま、いつのときにも先頭に立つてゐるものと思つてゐた詩人群のあひだから、一向に強いさげびを聞かない。あはて、駈けだしでもらひたくはないが、起ちあがつた民族の覺音が、きこへないのだらうか、と首をひねつてみたりする。

でも、ク新日本文化の會々、會員中に先輩詩人の名を見出したりした時には、漸く詩境にも、といふ明るい氣持になる。

まみれよ、花粉

長谷雄 京二

したゝる みどり

かたむく 炎

佇む 梢

瞬く カペラ

のぞく ハンケチ

はなかむ 少女

かくした トマト

濡れた 掌^{てのひら}

ロ マ ン

飯の、宿業の

ひそむ 蟋蟀^{こはらぎ}

ふくらむ 子房

うづく 切傷

いきれる どくだみ

めくれ カレンダー

地肌 はにかむ

小 池 亮 夫

白粉の魔手脱れんと

夜を徹して足搔けど

毛だ物の根性、飽く迄深く

人を愛さんと背を裂く

鬼と罵しられ

軍さ猛りやまず

今日を駆りやまない

血 縁

肉から生れ 肉を生み

その永久の血のつながりよ——嚴そかに清らかなの

がいい 強靱な一すじの愛情の氣品もまた

だが——たちきることのできないものか

その不純なるモラルの枷を 僕のいのちにあたへら

れた重量を

柱唇のやうに匂ひのない家の歴史はくりかへされ

る

僕に似た もう一人の蒼い貌の子

この巷に伏し、この心

斬り死なんかな

紅を濃く

ロマンの花を

煮え沸へる。

川 越 勤

僕が大人になつて それもやがて——

血縁を循環して 新らしく

尙あたらしく

それは連綿として……………

夜 の 坂

坂をのぼりながら

僕は闇の深さを量つてみる

風は僕の脊に追ひかけ 僕を吹きぬけ
坂は——ひろきがまゝに氷り 何んの物音もしない
ひるまのあの騒めきをおもひ
僕は立止まる 耳を敬てる
——坂は眠つてゐる ひえびえと眠つてゐる まる

雲を蹴ごばせ

清 水 達

で心を喪くしたもののやうに
至極あたりまへのことながら 僕は哀しみ いま見
知らぬ土地のやうな夜の坂を
街の方へ 風と僕とがもつれながらのぼつてゆく

詩人の仲間にシャンパンをついで
歌ひませう

歌ひませうね

とQ君がおもむろに口を開く

いや

踊りませう

ね お嬢さん

とL君がいふ

オーケストラが始まる

靴の紐を結ばねばならぬ

おや
これは これは
ハンカチ
の
汚点
航海して行く船のマスト
やがて
むんむん齒痒の臭をさせながら
美しく着飾つた飛魚が
スクリーンでのやうに

『藝術のために』と絶叫する

奔牛をのせ

水平線の中に赤い旗を翻翻とひらめかせつゝ

おち入つてしまつた船の汽笛

いにしあるの落書

長 谷 川 霧 子

★

E 人いちばい吸泪と潦る血潮を抱擁してゐる唇
だが 意志の行爲は表面を覆つてゐた
紫石英の眼鏡にどんな思念があるのか……。

★

K あの頃 窃かに握つた拳よ
逝いた日月に喪失した涕線よ
泪美藍色の隔煙がゆるやかに螺旋を描いてゐる

★

の

波を縫ふ

△一人のおとこが船室で通りの悪い煙管を修繕し
てゐる▽
——未完——

S △この手はあまりに荒々しい

而し その中から美をみいだすだらう▽

雙眸に想ふ追憶は褪せたロマンスか

古びた記憶の頁をめくる北風よ

★

T 鍍金よ
おどけたてんぼで點り
消えて行くすかい・さいん

秋 像

法 城 寺 閑

この日、華麗な虹を呼ばなくなつた噴水の料亭で、私は晝餐後のあツたかいレモン水を飲んでゐた。

あなたは白い手袋をはめたまゝ、素絹の椅子に腰掛けて、その美しい瘠せた細い眉を日にすかしてゐた。

私はあツたかいレモン水のみをはる

あなたは臆て無口なうちに、素絹の椅子を離れ去られるだらう。

私はポケットから真のケースをとり出すと、いち早くマツチを擦る。そしてめらめらと立ちのぼる白煙の輪の中で、私はあなたと別離^{わかれ}の日のいよいよ近いことを考へる。

新 秋

穹に尾花の白い雲影が立つと 街道に沿うた篠懸の
竝樹には、いち早く指揮者のない風の音楽家達がや
つてくる。パラパラと日を透きながら。葉を鳴らし
ながら。
其の音楽家達の白い影よ。きやしやに細い肩よ。瑠
璃色に澄んだ聲帯よ。私は誰れよりも彼達の訪れを
たのしくききながら 街に一ばいのレモン水を飲み
にゆく。
その頃、街では、處々剝がれた日覆の舗道に青い穹
が凹み、陽に白けた氷菓子屋の三角旗の影に小鳥籠
が置かれ、漸やくいそがしくなつたステーションの
廣場には赤い郵便ポストが目覺めてゐた。
その晩私は家に歸つて銀色の灯影の其の下で、北方

の町に住む未見の親しい友に黄色い季節の秘箋を書いた。其の後の無音を詫びながら 其の後の病氣を

昇 天

國 廣 勝 太 郎

紫陽花にかける夕陽の まぶしさ！

竹垣には幼年の夢がからんでゐる

ながれ雲が えんじ色に燃えさかる ころ
私の胸に ほのかな思念をかきたてるもの――

花園では眞白な蝶と踊る 素裸の童女たち！

乳の香をまきちらし「萬歳」と小旗ふる

花粉は微風^{そよかぜ}に乗つて――私は碧空へ

ゴム風船は山の頂ではちいんと はちけた

頭上^{ひらめ}に閃く 天使の聲――おゝ

みなみの海

私の魂は昇天^{しょうてん}を許された喜びに震へてゐる。

あこがれの みなみの海！

はるばると おとづれて ためいきをする

私は 白いかもめ！

温泉^{いそゆ}に湯の花が 咲いてゐやうとも

私の心を しるよしもない

海の ながれにのつて

みなみへ みなみへと 續いてゆけ。

雪 景

上 松 ち か 子

昨夜のオルガンは歌ひやむで
白い蝶の群は吹雪の舞に酔ひ痴れて化石となる
大陽は山の肌にオレンジユの衣裳をかけ

紅宴の片隅にて

—裏町の第一部—

既に冷徹なマナクルに磔殺されたヴィーナスの胸像
卑俗な囁きに爛れ果てた 紅唇の感傷は 飽くこと
なく透明なロマンに接吻を授ける

△壁間に影をきざむ哀情の科白

△眈の中までもたゝく驕聲のこだま

△心中にタクトする みづからへの侮蔑

△室にはうすい熱情のたゞよひ

梅 澤 恒 夫

地平線はまぶしい白金の腕を伸した電光のやうに
庭の銀盤の上で犬は地圖を引くので
私は今日もレコードの上を滑る約束をした

黒い小匣の中に身悶え乍ら 淫らな感情の山脈に競
り上つて行つた昨日への追憶を 夜とともに靴底に
しのばせながら 何はなしガラ、く、囁はねばならぬ
自嘲賦の共演
ドンファン奏でるジャズの粉飾する 膨れ上つ
た肉体のアルバム

△自己の感情すら引き廻し得ぬ幾つかの偶像

△あゝ今日も窓々がその影を映し
△歌を忘れたカナリヤの青春が
△新しき絶望の淵々にうかぶ

あゝ！ 又も彩られるスキヤングルの祭典に 躓い

たまゝ起き上れぬ弱い女の くずれた口笛が 紅い
ベールの蔭に ひとり私の耳朶をうつ
退かう 退かう ハレムの宮殿よ 危険信號の様な
切手ほどの窓々よ 鼻をうつ香料のあふれは 今日
もおとろへ行く苑の象の如く

筵上の老婆

丸 山 吉 三 郎

大都會の繁華街に
明滅するネオンサイン
氾濫する群集

低劣な感傷

汗ばんだ肢體を
清楚な衣裳につゝんで
シヤンデリヤの下を游泳する
茶房の女

筵上の老婆は

ひからびた指で

癢滅にひんした

三味の絃を掻きならす

そこに

散らばつた

RECORDのメロデーが

散布する

幾枚かの銅錢
突如、薄闇の路次に

女給の狂聲が
爆發した

妓樓の灯火を慕つて

蛸集する

性の飢渴者

ひきこ女、易者、似顔繪かき

辻占賣、艶歌師、ボンひき

あゝ、こゝにも

書

齋

津

坂

霞

呪ふべき寄生蟲と
落伍者の哀史が

いちにちの平安すら

得ることなく

娼婦^{おんな}は

痛ましい

獸慾の犠牲となるのか

Munros King of kings の前に笑むローマンス

カーネーションは白く揺れ

母の御膝に泣きくづれる

点在する赤インキにおびえて

タイガーは書籍を噛み合ふ

紫煙によりがへる青春

幻想は波紋、鼓動の泉

眼眸は絢爛の追憶にかすんで

胸にかゝるみやびやかな荷重は

指を細くふるはせるのでペンを描いた

靜かに希ふ君の不幸を――

註(Munros King of kings は花びんに刻まれてあつた
文字)

夜 霧

追

想

松

村

一

美

目に盡せなり情雅

美しい景仰――

現實の車中に揺れながら

今歩んだ、ロマンを見送つて行く

古い呼吸の續く度びに、私は

過勞に匂ふ風景を思ふ。

晩秋に眠る母がゐる、父の聲までする

あの遠い故郷に、民族的な薫が幻影となつて降つて
ゐる。

ものあたゝかな今宵は、

わびしい乙女の聲か……それとも

燈明にうえた、聖者の^{ウツゴト}謠言か――

傳波の様に聞く、衆情の中に

かすかに續く、小さな戀人^{イトナ}

私の生命は季節を営み、休息は

春の世まで、にほつてゐる。

順氣に歌つてゐた、昔の詩体も

篝火と共に、私の追想に追ひ重つて行く。

應 答

知覺者よ――

砂 丘 の 詩

水平線へ傾く木棚の群を乗り越え 跳び超え草を分

け 露を踏み

紅い玫瑰のかほる距離に聴く汐騒だつた

いきなり冷えた頤を抛けだして ふかぶか砂に埋め
れば

のこされた肉體のほのかな疼痛に甘美な疲勞を感觸
するのだつた

達い季節風は白々と砂を汐煙のやうに散らし
散つた砂はわけもなく衰へた唇頭をせつなく濡らし
いつか昔 こんな風のなかに泣きたかつた想ひ出な

よく眠れ――

明日の武裝はゐらなくなつた
機械人間のあきたらぬまゝに
今自然は大きな吐息に動いてゐる

嶺 皖 彦

ど……

砂丘を掘れば砂 掌からこぼれおちる砂

白い手套を埋めたところで

右手を喪失つた處女の追憶にしばしは假睡^{まどろ}みたかつ
た

砂丘よ

乳房を見せる戀人に似て……

今更 ほろ苦い汐風に蓬髪を弄らせつつ
その風化した胸のふくらみに力なくもたれてうたふ
私だつた

山 裡 初 夏

わたしは終日アブを殺してすごした
アブはますく群がりキバをむいた
牛とはかくべつ親しくなつた。

教官は^{チヨカシ}（氏ハコウ呼バレテキル）ちかごろ りつばな鬚
になつた

いちにち中 楊柳の繁つた岸で 泥河に釣をたれて
ゐる この泥水はやがて シベリヤをよぎり 樺太
のむかうに流れてゆく が

追 憶

めくりめくる本の輕ろさに――バルコンの月は蒼白
く冴え渡る今宵。遙かなるものへ桃色のランプを點
す。

會つての日おごりに咲えた紅ばらは遠く

堀 江 信 夫

教官は そんなことを考えてゐないらしい、

嶺からくる採木の斧の音

筏を組む苦力たちのかげごえ

山すそにつゞく小徑も草にうもれて

縣城に行つた連終は けふもかへらぬ

小屋のまわりに 小鳥たちの おしやべりがうるさ

い

微風に ほろ ほろ と散る 花花。

吉 成 糸 子

太平洋を北へくくと漂流することだらう
丘に一本の白すみれが咲いてゐるので……
返らぬ青春の歌を唄ひつゞけながら。

私の思念は最早や法螺貝の夢から覺めたけれど、昨日のまゝに起き伏す若き詩魂は……

清教徒の鳴咽にも似て物哀しい。

過去の幻夢に眠る花束をリボンに結んで

アミーの胸に飛せば、杳くて美しいその距離よ

捉えがたき追憶の秘密よ。

秋

ひそやかな想ひ出を残し星が消え初めると

渡り鳥の饒舌に金木犀がほのかに香る

飽和された思念の中で……

淡紫の夕べの夢がしつとりと

船の中の丘

女は太陽をおんぶして船首に立ち

男はその胸でいつしんに棹を押す

彼らは船の中の丘に氣づかない

裳裾にからむ

今朝も東の空に合掌する老母の姿を

寫しながら燦然と輝やく秋の陽光

飽くまですんだ朝の大氣に

百日草の花を剪りつく亡父の面影を追ふ私

季節の蹠ではこぼろぎが化石し

蕎麥の花が眞盛りだ

卵色のペーパーに透명한秋空を翳せば

近くて遠いその距離よ

此處にも美しい年輪が轉がつてゐる

伊野亭二

丘には菊花が撩亂と咲きこぼれ
美しい葩が風に散つて水に浮く
丘の上で餌を拾ふ鶏

男は泥水からひっこぬいた棹で鶏を追つてしまふ

棹を水の中につっこむと

水底からちからが男の胸をぐんと押す

ちからは男の丘であつた

蒲田へ行く男

蒲田へ行く道程を訊く若い男

折れた旗竿

塩谷安郎

記憶帳に記したからとて

私は頭を空っぽにしない、

その日の重い針に刺されながら

いつかは必ず来る嬉しい日のために

誰も知らない夜を眠る

夢は針にさゝれた蝶のやうに

一夜中荒れ狂ひ

浅い睡りからまぶしい朝へと投げ出される

そしてここは日比谷公園

あなたがあゝいてこられた小岩からここまで

わるくするとそれ以上あるかも知れませんが

私はわざと教へ方の長い形式で教へた

離れてゆく若い男の後姿を

私は背中にある眼でいつまでも見送つた

私は記憶帳に複寫紙をあて、
前の日と同じことを記入する
私の胸に嬉しい日への豫報旗は悲しくもかゝげられ
ない。

蒼い夜

遠くでおこる弔歌

風は悲しき使者となつて駆けて来る

私は悼花を捧げて
死んだ黄昏の暮の蔭に逃れる
残された唯一つの安息所に
とぼしい心に灯を落して
いたはつて呉れた母の手を慕ふ
コトコト回轉するフィルムの裏に
私の表情は夜の花のやうに色を變へていつた。

北 壁

蒼白い想念を抱き
人氣のない日蔭の地上を凝視め
幾度ともなく吹きつける
雪や雲の冷さに震ひ
翳りの歳月を鬱積させ
黙々と堪へ忍んでゐる北壁。
この冷たいしこりの一面に

歌聲はここにも横切つて來て
またもや胸に黒い蜘蛛をとまらせる
やがて巢は十重二十重にめぐらされて
私の姿は消えてしまふだらう
コトコトとフィルムの廻轉の音のする
蒼い夜のなかで。

佐 藤 菁 雅

夏の太陽が遍照して
慰めの花を咲かせてくれやう日を
只管に信じてゐればこそ。

虚

茜浮く河のほとりに獨りゐて、ぐつと嚙みしめたの
は不覺の涙でもあつたであらうか。
露はな肋間に音もなく降り濺ぐのは不毛の生活の砂
でもあつたであらうか。
あゝほのかにも落葉に翳された少年の日の光榮よ、
見はるかす地平のかなた青雲はむなく虚無の霧と
なつて散つた。

わ か れ

ほう ほう と呼ぶこえあり
ツツツと全身に走る水蟲
感傷にちらつちらつ 笑園が呆け
絃をとりあげてうたふ唄に
白い煙がたち昇る

小 松 茂 彦

海浪のやうに額に迫る夕闇のその中で聳然とわたし
を待つものは何であらう
見返ればこの風景に象嵌された千年の無聊
いみじくも天上に墮ちた盲目の神々よ、靜謐に明け
暮れる常住のふる里がもはや何處にあるといふのか
今日も戦れた皮膚を風に吹かれ茫々と蘆荻をわけて
定めなくわたしは歩むのである。

木 村 茂 雄

虹橋を渡つた影像
いま
眞さかさまに霧となり
幾たびの肯定が カサカサと
掌に
轉ろびては狼狽する

ほう　ほう　と遠ざかるこえあり

爪噛むで

そつと放してやつた

雲のゆくえ　よ

こみあぐる風の
うるみける地肌に
しづ運ぶ影の曳かれゆくを。

十四・一・二六

貝殻の中の眞理

江　越　馨

理屈を抜きにしたッ赤ちやんッが生れた

今朝の新聞は恠う噪ぐのだ

止れ！吾が愛する汝等よ　それは偽れる眞實だから
だ

其の爲めに、雨にほだされた白百合の花の下で

僕は一晚中辛い思ひをした

それが何故だか僕自身にも判らない

と恠う一口に両手を開いても

汝等は私生子のやうにひねくれるだらうが

然し　美しい疑惑　が僕の命令者だ

故に　僕の花苑は今もなほ
血の中に一點も濁りのないことを
自らが示して退路を心中に探じないのだ
お判りか　水彩畫の裏に潜めるものが
貝殻の中からそんな眞理が生れたのだ

秋　夜　無　想

挽　地　英　夫

日中の暑さから離れて

靜かに沈んだ草原に行くのは

私の心を愉しませる

しんしんと露にぬれる草

私の眼頭に冷たい印象を残して

通つてゆく風の佗しさ

穢らしいものでも

禪僧が持つ人生感の様に

殆ど凡ての惡も苦痛にはならない

蟲がすだきをかへし
とゞこつてゆく雲の動きも
ほのかに明りをのぞかせる原に

人生とか何とか

私は今そんな事でこの靜肅な宇宙を

さきたくないのだ

緑に染る指先をながめ乍ら

秋草を手折つて見た

桔梗花の一莖であつた

二五九八・八・二九

花

杉　山　眞　澄

偽りのない花を

けがれぬ純情の花を
咲き出すそのまゝの姿で

永久に記念出来たら

北國の雪は

またとなく綺麗であらう

日本海の嵐

照り陽に汚れた屍体を残すもの

鷗よ

海を越へて……

私の生活は波に捨てられるだらう

2

花に若し自己を知る鏡があつたら

人間の生活は粗い壁土の様だらう

宴

——北國の雪の子達に——

あの ばんざいの 聲も

雪に翻つた 日の丸の旗も

もう しつかりと 肌から離すまい

南風が吹いたら咲いて

東風が吹いたら散ると言ふ花よ

盗人の様に花園を荒す しれ者よ 星！

暗闇に灯さへない鑲の連りを

宿命と言ふそんな重いものが

花の反面に持つて明るく伸びるもの……

兒よ 健かなれ

雨降り 風吹き

雪が降る日が續いても——。

茅 野 信 義

淡い粉雪が ちらちらと

指のふしふしに 冷たさをたへて ちつても

とうようの子たちの内腔へ 肌をかようもの

山脈の梢をならしてくる ふるさとの

ましろい はなの ひとひら ひとひら

いま こんなにも つぎつぎと 掌にひらくよろこ

び

あなたは そのはなの うてなにすはり

遠い このくにの れきしの子となる

ひとのよの はれぎは ぬぎ捨てゝ

バチバチと もえさかる いくせんねんの炎に

りようてを かざして

單なる記録

——冬のフロンス——

伊 藤 隆 夫

遠いところからやつて来た冬の暴風雪。

渦状の花粉を置いていつた季節の挨拶。

白い蟲のような文字が降ってくる穹、

バフを使ふ樹氷の立体。

風と共に 空かける かみかみの聲を きいてくだ
さい

あの ばんざいの聲 あの 日の丸の旗をだいて

海を越えていつた このくにの子たち

いくまんにんの ふるさとの 子たちが

頬をあからめて 臉をそめて

ましろき はなばなの うたげ

あゝ かぎりなき 日本のうたげを きく

——そこには とうようの すみかであるのです。

凍結せるエスプリを抛げ込むけふの暖爐、明日の暖
爐、そして毎日のだんろ——一九三九年。

推理を遂つかける 定価八錢の煙の輪投げ、
デザインするparadox先生。

暗い陶器の太陽、
退轉する推進機。

胃腑を通過するにがいスロップの敬禮。
酩酊の八衢にしきりと鋳を打つ 人造の人造でない
方の内燃機關。

赦すべからざる愛情の高利貸よ、

小さな貝殻

何も云はないで小さな貝殻を
唄ひ續けようとする私の胸の上に
あなたは そつと 落して去つた。
扉をぬけて石畳を去り行く足音は
秋の日の描く屋根屋根の流れの中に
ほゝえみ も聞えず
あなたは とう／＼此の部屋に訪ふ日がなかつた。
此の日より

遣ひきれないコンマとビレオッド。

結局 解つてゐるようで解らない終幕の台辭に悩む
若いコロンブス。

銀蠅の糞が談話する海圖のめるん。欠伸する真理。

いつまでやつても合はない——人生の大晦日。

桑門つた子

正しい日課は峻嚴な計畫の下に
重量を持ち上げる穹窿の核心に坐つて
定器とコンパスの上に花が揺いだ。
製圖臺に向ふ熱した耳は
やさしかつた 抒情の波を 振り拂ひ振り拂ひ
響く聲聲の山の歌を知らうと
山麓の蔭に飛翔をこゝろみた。

幾人かの死者を送つた野の道に
私は 眞紅 の林檎の實を創らうとしてゐる。
道は遠いらしい。
あなたの聲音は 淋しく
オルゴール の中にも在つたが
近寄つてはいけなさと嚴しい銘文をレリーフしてあ
るのに氣が付くのだ。

兎の死

前田威

終日雨がしと／＼と降つてゐた。

箱をかじつてゐた兎。

ある雨の降る日に

兎の姿は箱から消えてなくなつた。

猫の爪のあとや

血餅のあとや白い毛なみの残りが

雨のふつてゐる軒から軒へとつゞいてゐた。

獲入れの朝

朝飯のゆげが顔にうつる。

茶碗にうつる秋の陽の色。

朝の冷えた空氣が部屋中に入り込んでくる。

黒い麥飯の重みと黒い番茶の匂ひ。

田舎の欄窓から朝ばれの

輕々した蒼い空を見てゐた。

花ご蝶

藤井伸

輕快な洋樂がきこへて
暖房の家のなかよ
うらうらと日もうかび
小春をむかへた空氣のいろよ
その家の庭に
みどり色の小女がうかぶ
ひらひらと舞ひおりた蝶よ
花がほしいのか あかいいろを求めてか
少女はきつとすまして

北の掟

冬木皎之介

1
北方の宿命を擔ひながらやつて來るものがある
——觸るるものを迎へ——

觸るるものに靜止を唆かすものがある
總毛立て昨夜吼え續けた黒豹の岩山
その頭蓋にそそり立つ嚴しい白の掟

既にチラチラと燐光の瞳を追つて墜ちゆく季節

2

蝕む陽の隙間から覗く冬の貌に
樹海はもはや牙を剥いて
黄葉は絶えずさはめき狂はしく起伏するのだ
烈風は銃丸の激しさにひやうひやうと鳴り
谷々の鋭角の底を目ざしてさつと撒りゆく枯葉の悲
しき衣裳よ!

ある挽歌

めくらの情熱が燃えたとして
奔く氣流はふりむかない
かくれて溜息をのんだとて
ばら色の夢はのぞかない
骨のくづれる音がする
感情の群れのたつ氣配

小林節子

浩然と胸を張りながら
その一滴の泪も滾すまいと
そつと衿元をかきあはせる私
風が死ぬ 喚聲がもり上る
光りがこぼれる 瞳の中で……

3

そこに老大な建物がある
外部からする一群の雲の馳り
内部からする冷たい翳ある焰
とりまきは季節の變遷の音樂でもあるか

4

審判の日が來て小鳥等は裸形の群を飛び越えて山裾
の廻廊は寒寒と唄びてゆく

訣別

さわやかなグリーンのセータが着なくなる
少女の指がなつかしい
私は歩き出す 大人の心を憎みながら
あゝそれが眞實プラタナスのない街であつても

泣かなかつたのです
二人の影は凝固してゐるのに
灯のない部屋に訣別の言葉は白く
たゞ 想ひだけがしきりに動いてゐた

白い手の祭

白い手の絶えざるリズムが透明なお天気を青く亂
す 白い手の旋廻が風を南へ青く送る 白い手の祭
がスペイン風の晴着を青く染める 白い鳩の群がば
つと光ると青い草原には 紙風船と蕾になつた子供
らが轉ぶ。

雲

よれ／＼と空腹をひろげて睡む旅人

藤 浪 里 子

唇

調子の狂つた和洋合奏
終日頁をくる紅の群

大 橋 勝 利

除夜

地下道を――
ハイヒールの蜜蜂が急ぐ

ネオンの光りの輪に 民衆は空な歩調
友よ……ああ隕石？

いまは 百里のけんかくにある
粘瓦な本立の中に 私はペンをふるう……追憶に
あの夜！

私は 追憶をたづね 今宵も――
除夜の鐘を待つてゐる

冬

大理石の燈火は 跪いた悲慘なボヘミアンに
つららの顫律を刻んでゐた
鼠色のシルエツトを抱へ 除夜の鐘を顫へ待つ
乞食らに 私はぞつとおのゝいた
秒健の音は――全身に凍みた
墓場色の靄をくぐる ネオンは トルソの眼
幽かに……赤く青く遙かの民衆に――私は
瞳を閉ぢ 民衆にもまれ進んだ……新宿驛に
友よ 追憶が 脳にかけのぼる 一人――

鉛色の雲に騒ぐ……銀青の風は
紅殻のやしろと海豹の異臭をのせ冷たくジャンプす
る 葡萄のように通る日参の群が
鮮かにタツチをみせる 家並をくぐり……
魚鱗の閃きをみせる 聖戦の小旗は
街衢の上――子供らの旋律を汲む
柏子木が鳴る……みろ……一齊に瞳がころぶ
風が 踏み躪り 棕の巨身に狂奔する

新詩集評

詩界の優秀なる近業として散文型にその圓熟の妙を極めた菱山修三の「荒地」は堂々一家の風格を示した名詩集である。更に新人の二傾向を代表する數冊の詩集を擧げる事が出来よう。故西崎善の「(hanson sons Paul) 川口敏男の「花に流れる水」とは緒に純粹詩の出發からの進展であるが所謂「オアルマリスム」に觀る如き聯想の斷片的構成の缺點もなく、美しいエキゾチスム的風物の具象化の成果を示し、加ふるに輸入的技術の秩序ある消化を實踐した作者の確乎たるスタイルには多くの學ぶべき新鮮な條件を詩界へ與へたと謂ひ得る。稍々舊刊に屬するが濱名與志春の「診察の耳」も偕に信頼すべき要

性を有つよき詩集であつた。同じ著者の近刊するといふエッセイ集も亦吾々の期待する所以である。

指の秩序

兎の耳をあつめませうね
まゐる乳房がふくれます
では飛行船をあげてミロオの手を
追加しませう
手はどこまでものびていくからで
す
ひかりが鬼にかはるやうに
かざりないものはみんな乳房に髪かみ
髭ひげつてくるのです
あをいガラスは
人間の指にかはつて
すぎまほり
ふるへる頬をとらへてあなたを聽
くのです

ふくらな蕊に眼をさぐるからです
ほのぼのとにほひだすからおどろ
きます
それは秘めてほのかな花の秩序
ひかる涙を吸ふためです
花の芽にしづかな唇をさがします
この繊細で豐饒な擴がりをもつ句
の露を造り得る者を川口敏男の他に
求める事は恐らく至難であらう。こ
の花の香を好むと好ざるとは最早角
度の問題ではない、そこに異議を差
挟むものは感覺に於ける人種の距離
を示すのみである。

杉浦伊作の「牛島の歴史」、高島
高の「北方の詩」、竹中祐太郎の
「レール」、和田健の「生活の貌」、
和仁市太郎の「石の獨語」等を以て

する一群の詩集は偕にリアルな思想的背景を有つ傾向として顯はれた。この中、和田と和仁のものは稍々自由詩的角度の習癖が纏つてゐて時代的洗練性に缺けてゐるが、杉浦の老巧な具象化、高島の透徹せる思念の冴へ、竹中の凝集力等はいづれも相當の成果を納めてゐると謂ひ得よう。嚴しいリアルな詩化は描寫の散文的弛緩と構成的知性の破綻を伴ふのは必定であるが三者の角度と手法とは相當腰をすへた構へが出来てゐる。唯、竹中の詩集には扉に太上段に掲げた宣言の如きものがあつて雅氣がキザに感ぜられる缺點があるのは遺憾である。

池田日呂志の「カオスの鶴」はアルカイスム的憧憬と人生派的諦觀との二つの傾向の詩篇を集めたもので言葉、文字の構成技術は相當練磨されてはゐるが未だ作者の角度は不安定の位置にある。エリオットの謂ふごとく、考古學的事であることは同時

に獨創的であらねばならぬ。煙突頂管やデパートを描いたとて何もモダンではないし、反對に古代王旗やポロビヤの神火を書いたからとてアルカイックでもないのだ。アポロンの笛やエホバの髪を單に古代的憧憬のみで表現するのならば古代貨幣等を蒐集してゐるに過ぎぬ。反對にモダンなものの單なる描寫はモダンなものと同價値のものを鑄造してゐるに過ぎぬ。實際、他の時代生活に透徹し得る力のある人は同時に自己の時代生活にも徹底し得る筈である。鐵眼壁の實凸部と銃眼とを理解する詩人は煙突頂管をも理解し得るし亦その反對のことも謂ひ得る。或る人はアルビイの大殿堂の建築をビスケット工場として觀ることに依つて之を理解することが出来る。またアルビイの大殿堂を考へることに依つてビスケット工場を最もよく理解することが出来る。それは單に方法の主觀的相違に過ぎないのであるが、この

作者に求めるべきものは何よりも先づ角度的確定であらう。この点前述の濱名與志春の詩集中より「庭の歴史」を次に引用して置く、「古典」と「現代」それに對する作者の角度的確立に注意せられよ。

庭の歴史

木洩れ日が 鏗屏を叩く
園生に 斑点がこぼれる
蝶のとびたつ草むらのやうに

陽をうけてうるむスランの頬の果實
あらはな薔薇をゆする

傍らに 野性のまゝの風姿
水だまりの空に白いベッドが泛ぶ
魚の虜になる ナルシスの胸
新らしい庭の史跡がこされて

貴夫人の瞳のうへに
聲をひそめる噴水

古い手管の泪をふきあげよ

—診察の耳より—

大谷忠一郎の「空色のポスト」は大正期の自由詩の正統的な角度をもつ詩集であるが、この著者の素直なスタイルは案外大きい根柢よさを示してゆくであらうと思ふ。しかし其處には未だ素材の構成、聯想の飛躍等の陳腐感のあることは指摘して置く必要がある。

それからアントロジイとして詩報社の「新日本詩鑑」第一輯が出た。組方も三段組各人一段として經濟的に納め加入費も僅少としてその大半を新人のためにアンテパンダンとした点編者の才能であらう。唯、寄稿家の作品を詩歴順に並べたらしいが之が全くのデタラメであるが遺憾である。むしろイロハ順にでもしてつた方が無難であらう。情實や利害の關係で所謂公器を標榜してゐても一向に實行が行はれてゐない刻、こ

の編者の総合的集成には讃意を示すべきであらう。

「山口縣詩選」これは詩と俳句との選集。同縣始めてのアントロジイ、三十九家中、物語詩人として國木田獨步、嘉村磯多、中原中也、藤村端山本秀雄があり。郷土のささやかな詩塔を建てた編者の勞を多とすべきである。筆者の郷里である名古屋地方が之の種のアントロジイの最初（大正末期）であつたが各縣別の選集が全國的に行はれることを望む次第である。（M.K.生）

全國詩誌一瞥

與へられた頁の中での多數の詩誌の寸言である、豫め斷つて置くが、この中興味あるものは改めて筆を執ることにして進めてゆかう。時局の影響もあらうが、近時詩の雑誌の休刊、廢刊が夥しいのは寂寥である。しかし之を以て詩界の不振を託つ理

眞の革命は之等の人々に據つて行はれなければ現在の詩壇では一寸人材が他に無いのだ。新人立原道造、杉山平一の精進の有望性。前田鐵之助の「詩洋」は百號記念號の尨大な刊行を實現し加藤健の如き有望なオリジナルな新人を生んだ。この實績は主宰者の不斷の努力と徳望の致す處であらう。この雑誌が更に新鮮な人材を擁する日が將來するならば恐るべき「勢力を齎すであらう」「新領土」と「VOU」とは頃日不振である。この二前衛も今の處人材難である。前者春山行夫の純粹詩の再檢討的エッセイは讀みこたへあるものの一つ後者の詩の方法論的普遍性は最早一つの轉捩期を要求すべきであらう。「不確定性ペーパ」は詩人の個人的研究、高村光太郎と百田宗治が登場したが、忌憚なき檢討で面白い試みである。「ボエチカ」は恐らく永久的存在であらう。此處に依るプロフェツサ達の觀望は羨望に値する

が、いつもながらの不満は積極性の缺除である。元老河井醉若主宰の「女性時代」は文藝綜合誌であるが古い女流田尻稻子が健康な作風を示し、十時延子の純情、槇美香子、岸小百合、古閑深雪等の新人が生れつつある。「ごろつちよ」は古い女流誌であるが、各傾向の女性を集めて相互に檢討してゐる点は注目すべきである。深尾須磨子の極端な前衛派排撃の短文は相當の刺激を與へた。坂本茂子、岡村須磨子、方等みゆき壺田花子等の不斷の筆鋒、新人澤木隆子の清新な聯想の飛躍等。亦更に新しい女流を集めた「斷層」が出た。石垣りん子、葉樹えう子、逸見貞子等の核が殻を破らうとしてゐる「詩人界」は歌謡や童謡を混へたもので方向が明瞭でないが大体自由詩の流を擲むものであらう。江口隼人の作品のみが優位を占めてゐる。パンフレット「聯」は佐藤一英の四行詩の提唱誌であるが、之の新詩型が

現代に適當な普遍性を有つか否かが一つの根原的な疑問である。宜しく四行構成の必然性を掲ぐべきだ。「詩宰府」は正月に復活號を出した。ジャンルの多様性を有つ点に於て主宰者山田岩三郎の立場は可とすべし。巻頭平山正利の「北齋」はアルカイスムの現代的消化に成功した佳品。「詩階級」は謙讓な態度で前進する純情な新人の群で、梅澤恒夫の冷徹性、水島秋生のリリシズム、藤井伸の哀愁等。創刊した「荒地」は綜合文藝誌で、詩とエッセイは鮎川信夫に止を射すのみ、高度な純文學の目標に向つてゆく態度期待すべき誌である。三浦半島から「植物派」が出た。純粹詩にプラスするものを有つことに依つて詩の文化的意義を再認識するといふ津田欣二の主張は肯定出来る。米倉壽仁、岩本修藏、高橋博哉、林勝彦等が執筆してゐるが内容も編輯も同人誌の優位たるものであらう。「月曜」は滋賀縣井上多喜

由さはならない。單に現象的な事實をのみ問題として自己の詩の研鑽を忘れてゐるような者は畢竟野次馬に屬する。「詩作」の「饅飽」と「歷程」の休刊は特に惜しいのであるが「文藝汎論」が新人の紹介を時折試み、亦詩人賞を僅少とは謂へ有力な新人菱山修三の「荒地」や不遇の中堅中野秀人の「聖歌隊」に與へた事は斯界のために謝すべきである「蠟人形」も既に早くから所謂八十式の甘味讀者層を目標とせず愈々詩の本格的研鑽誌として乗り出して來た事は何よりである。大島廣光の如き篤學の人士が具象的な方法論に關するセツエイを掲げてゐることも一般には厭過されてゐるやうだが注目に價するものだ。「四季」の室生、萩原の健實な作風の進展も丸山薫、三好達治等の有力な人々に依つて半ばその使命を達したかに想はれる。今之に望むものは内容的劃一性への危機からの解脱である。リリシズムの

三郎の編輯になるもので、全アートの態度を捧し、所謂同人誌の組織ではないらしく従つて執筆者が編輯者の慧眼の下に行はれるので低級な作品は一つも發見出来ない。堀口大學、岩佐東一郎、田中冬二、梶浦正之、高祖保、八十島稔、正岡容、亀山勝、瀧口修造、佐藤惣之助、岡崎清一郎等が執筆してゐる。現在詩集中の高峰に位するものだが惜しい哉不定期刊だ。詩壇はこのやうな詩誌のために積極的支援を贈るべき義務があらう。大阪から出てゐる「茉莉花」も「月曜」と同様にノヴァルな雑誌で、北村千秋の哀愁、濱名與志春のカット・グラスに似た透明性ともに味ふべきもの。「日本詩壇」は同人誌ではないが新年號に木水彌三郎、藪田義雄の二人の優秀な作品を掲げた事は讃むべきである。京都から出てゐた同人誌の冠たるものに「三人」があつたが今は休刊、「朱

偉」「新生」の二誌の不撓の奮闘を買ふべく、前者の財前義の淡彩的タツチ、河原寛一のサタイヤ、後者の潑刺たる新人群の壓力はともに地方詩壇に氣を吐くもの。神戸の「LE・BAL」は徹底的に前衛派で固めてゐるが編輯者中桐雅夫が篤學の士なので同人の作品も粒が揃つてゐる。創刊當初は體分整齊すべきフォルマリズムの不燃焼の傾向もあつたが改題される頃から確乎たる作品に變遷して來た。毎號外國の有力詩人のエッセイを紹介してゐる点も可とすべく、衣更着信、鮎川信夫等は最早何處へ出しても一本立の出来るアバンギャルトである。大連から出てゐる「鵲」は皆揃つて前衛的な技術の修得者達であるが、その内容的傾向には纖弱性はなく大陸的な強靱性を發揮してゐる詩壇まれに見る優秀な詩誌、瀧口武士、八木橋雄次郎、松畑優人、小池亮夫、宮下秀雄、三好弘光、西原茂、井上麟二等いづれも一

般藝術にも造詣深い見識をもつ同人だ。北海道の詩誌として「北方詩族」は木村茂雄の氣品ある編輯に係るもので濃厚なローカル・カラアと藝術の多方面への研究的態度が欣ばしい香川縣を代表する「香川詩壇」は五月に創刊號を出した。柴俊介、水谷忠彦、吉屋真純等、中堅の寄稿をも加へて、エッセイに詩作に重厚な編輯である。八詩と詩的Vの考察が特に注目された。「未完成」は自ら之の謙讓な題名の示す如き新人水島秋夫、嶺皎彦、大島翔介等の作品で充されてゐる。仙台の「詩性」挽地英夫の八冬の余韻V大槻博司の作品が鮎川桂介と對蹠的傾向を示しつつ、燃えてゐる。「詩聖區」は八乙女猿助の洗練が近頃特に目立つて來た。杉山眞澄その他の諸君の奮起を望む。山形の「詩・現實」は蒲生直英、佐藤總石等の思想的バックの展開であるが、これらの人々が表現手法に一段の修練をかけた暁の山形詩壇を想

像するのも一興であらう。兵庫縣の「生活風景」法城寺閑の編輯になるもの、未だ幼稚ではあるが其の謙讓な態度の裡に根強いものが張られるであらう。法城寺の詩と研究文が白眉。富山の「山煙」茅野信義の編輯上松ちか子と納藤英磨の詩が特異なもの、すがあきゐの死は富山詩界唯一の悲事。名古屋の「清水」は水城碎浪子の「地上のヘルメット」一篇が燦然としてゐる。宮崎の「龍舌

蘭」大重春二、黒木清次の迫力と昂然性、ことに第五輯の谷村博武のハ麥V一篇は近來の絶唱。福岡の「八幡船」の越智彈政の凝集的角度俵山尚美のリリシズム、岡田武雄の構成美等。下關の「火の山」白石軍司の單純化、原田昭二のレフレンの技術、松村一美の純一、更に多賀城の進歩は注目すべし。呉市の「柚の木」細川晃はリリシズムから再出發し始めた。田坂數夫の形式は考察の

余地を與へてゐる。この詩誌の唯一の興味は志眞章子の進展性である。その他休刊その他の事情で新らしいものが入手不能のため寸言を及ぼし得なかつたものに「聖」「日本詩作品」「詩・研究」「令女文苑」「女流文人」「色ある風」等がある。最後に近く詩の総合的公器誌「國民詩」が中央から創刊されると謂ふ、その使命を完からしめむことを望むや切である。(K・L生)

☆ テラスの午後 (ノート)

「詩文學研究」第二輯を讀みて

伊野 享 二

散文では「戦争と詩」(梶浦正之)と「アド・リビタム」(塩野保男)とを有益に拜見しました。

前者は、現下非常時局の一般大衆

を相手とし、彼らに受けむがため、同じタイトルで書かれてゐるいはゆる一流の綜合雑誌の常套的にしてかつ漫談的な記述とは、同日の談でな

に陥る弊害を説き、芝居そのものの中に深く没入してゆく熱情を缺くことを非難したが、戦争といふ現實に對しても、都會人は矢張り皮層的な批判を下すのみで、戦争そのものの中に突き入つて、その中から眞實を掴み出すといふことがないと思ふの

です。人生に於ける大低の現象は、

詩の材料となり得ると思ひますが、戦争が民族間の、生命を犠牲とする重大なる人生の現象である以上、すぐれたる詩の材料とならない筈はないと思ひます。ダメンチオなどの場合の如く、身をもつて戦線に参加するといふことも、詩人として決して不自然な行爲ではないのみか、その行爲そのものもまた、堂々たる一篇の詩であると思へます。

後者は、私の如き無名の詩人にとつて、大いに意を強うする文章でした。また、氏の詩といふものに對する眞剣さに敬意を表したいと思ひます。一日のうちの大部分の時間を、無味乾燥な仕事に従事してゐるためややもすれば詩に對する熱情を喪失しかける私にとつて得がたい刺戟劑でした。

詩作品については、平生考へてゐることもありすので、單にすぐれてゐると思つたものを指摘するにと

じめます。

「驟雨通過」(木下夕爾)
「蜩の家」(最上八平)
「厝を剥ぐ海鳥」(島田磐也)
「野生の花」(島田磐也)
「鳩と永遠」(浦瀬白雨)
「空の色」(小池亮夫)

満洲より

堀江 信夫

九月に新京に出下句歸山既に落葉してゐました。日毎山を歩き鹿やボイザを射ち、山塞を襲つて匪賊を殺し、冬ごもりの小屋を建てブリキのストオブを焚いて十月に入ると雪がつもり結氷し始めました十一月の始めに山を出ていま三十里位北の村にきてゐます。また机にかじりつゝの生活です。でも氣に向けば馬にまたがり山にも這入り、匪賊がくれば結氷した草原を馳け、豪快な機銃の音をききランプを灯して讀書を愉しむ、そんなこのごろです、ではまた

詩篇「青嵐」について

梶 浦正之

この本誌本輯に發表した詩篇を二三の人々に示した處『この詩には思想があるが難解だから説明せよ』

『この詩の意圖する目的を示せ』

『この詩の諷刺(サタイヤ)は作者の如何なる角度から出たか』等々の質問を頂いた。乍然、私の詩には特別に意味する處の目的がない。勿論これは散文的な意味の目的がないのであつて不用意に書かれたといふ事ではない。少くとも私の全目的は詩作品の意圖する効果それ自体で、作品の表現それ自体以外に何の説明も必要としない。讀者は顯はれた表現形式に従つて味つて頂ければ宜しい、そこ顯はれた具象の意味、すなはち含むものの素案は讀者の自由な感性和知性にと俟つもので、如何に解釋されようと作者は一言の抗辯もする勇氣がないのである。

尙、説明を望まれた方々と初心の方々とのために一應作者の意圖する

處を語句のバラフレイズに依つて述べて見よう。繰り返す迄もなく之は讀者に要するものではない。讀者が若し作者の意圖するものを感じなければ、それは作者たる私の罪に他ならぬのである。

先づ辭句の説明であるが、「グリーン・イジン・グ・ゲロウ・ア」とは洋庭園の中央に配置する玻璃製の魚眼レンズの球台。浮雲、樹木等四圍の風物を映す。「コー・犬」はもとスコットランド地方の牧羊犬、長毛にて性質溫和、現在は日本内地にもゐる犬種。「借景」は境内外の風物をとり入れて庭園の興趣を引きだてる一種の造園法。「亞麻色の髪」はドビュッシーの曲、彼は當時の樂壇の反響を推し切つて印象派を提唱した。「吳須器」支那明朝の中期より製作したる陶磁器、青繪、赤繪等がある「青嵐」とは嵐に非ず、五六月頃新

緑の樹間をのれ来る爽風を謂ふ。

新緑の五月、憂鬱の伴ふ美しい洋庭園の風景、麗しいが何となく空虚を感じる情景である。其處に組み立てられた一切の裝飾は淡い憂鬱から倦怠へと遷つてゆくのである。それは冷えた紅茶の沈澱から始められ、一点、借景の鐵塔を横ぎる燕の刺激が僅かにも之の倦怠の進行に一休止符を變化の妙味として與へる。またしても彼女の聰明な瞳が、あの惑はしい官能の疲労に曇り始め、竟に愛撫する音楽へと溺れかゝる、ドビュッシーの小曲は提琴の響に乗つてその特異な印象的色彩を昂揚し、更に夕映の自然が齎す感覺の濃厚性は愈々彼女をして幻惑せしめ、竟に恍惚として臉を閉ざしめるのである。「あなたの臉は靜かに帳をおろす脚光に濡れる壁のそよぎを残して」と表現したのは、臉の靜かに下りる態を舞台の帳に形容したもので、壁の房毛は長い睫を聯想し、更に「濡

れる」は眼球の光と脚光を想はせ、閉ぢる最後の瞬間を歌つたものである。

一方、この庭園の片隅では、古典への憧憬と誇示とが紳士らの話題となつて熱中され、羊齒類の葉と紳士らの美髯とが聯想的に調和しつつ續けられる。(この表現は多小諷刺的に歌つてあると見てよい)これも亦空しい裝飾的な陶醉に過ぎないのだその現象は異りつゝも同方向へと動く二つの對象は突發的な自然の椿事によつて忽然として結合され洗禮されるのである。それは何者をも清新に撫てゆかねばをかね風爽たる青嵐の一陣であつた。「あなたの探す言葉」とは、この幻惑的陶醉の裡にあつて何かしら彼女は自らの現在の情感にふさはしい言葉を唯の一言でも獨語しようとして逡巡してゐる状態を指すもので、「草月花の吳須器」は、庭園の一隅に今を盛りと咲き揃つてゐる草月花の赤い一叢と紳士

らの話題となつてゐる支那古代の貴重な吳須器の赤繪と色彩の聯想的調和を保つて同時に表現したものである。

友 情

本誌第二輯への寸評

冠略……非常に立派な作品集で興味深く拜見しました。是だけ多勢の方々が提唱して進んで行かれましたら確かに詩壇の一大勢力であると信じます。第三輯第四輯と愈々發展されることを衷心から期待してゐます

(喜志邦三)

冠略……まことに健實な御編輯にて、諸氏の御精進振をゆるりと拜讀いたしたく存じて居ります。

(原一郎)

近來稀に見るよきもの、殊にエッセイは少からず小生も無學なものを啓發してくれます。「戦争と詩」

「シュルレアリスムの周圍に」などはシツカリ的を射たものと敬服します。梶浦氏の譯文の輕妙には、たゞ／＼感服の至りです。作品の多彩これまたうれしく、小生の知れる名前も多くそれらの人々の活躍を羨ましく思つてゐます。(月原燈一郎)

★ 實に尅大なものでビックリしました。これだけのものをまとめてゆかれる貴下の御苦勞御察します。雨ふる日ゆつくり拜見してゐます。貴下の第二輯の茶筵はともうれしくところ靜かな佳什でした。

梶浦宛書信より「月曜」編輯者(井上多喜三郎)

★ 冠略……大變御立派な内容と御編輯です、もつと時評を熾にして頂いたら一層活氣を示すことと存じます。(安藤一郎)

冠略……御立派な出來榮にて感銘いたしました。今度の號では「驟雨通過」「蜩の家」「東洋」「作品」「石器の街」「茶筵」「猿酒」「秋冷」「流れ」「鐘鈴のなる夜」など清純な心をさそはれつゝ、拜見いたしました。何しろよく集められてゐるので敬服です。「戦争と詩」もおもしろく拜見いたしました。もう十年もすれば本當の「戦ひの詩」が出てくるのではないでせうか。やつと夏やすみになつて、机邊を淨くかんじて拜見いたしました次第です。(木水彌三郎)

★ 内容並に編輯方法等まことに御立派な作品集にて欣しく拜見いたしました。尙、拙著「T・S・エリオット詩・研究」に關し御懇切なる御批判を賜り深謝いたします。愈々御發展を祈ります。(佐藤清)

★ 試 作 欄 ★

便りを燦く 池上ひさ子

涙がほゝえんでゐる こわばつたほゝを引づらせて 私は平均された空の重さの下に昔のひとのたよりの一束にまづ、ちのほのほを近よせる

青い燐の匂が おもむろに白いひるまの焰と化粧しおほせるとき あ！ めらめらと今老いてゆく――あなたも 二人は若人ぢやあなかつたか――すべてがその名の下に許されたこのインクの体臭 蒸發した瞳の焦点に又してもすぎる あのをやるやうにすこやかな黒さと 強烈な光りの中に續けて捕へ延びた姿態

目の高さに散り残つた紅葉の敷を敷へてみても残りの灰のほろぬくい 手ざりは今も尙ほほろと

ぬくいので私は思ひ出したやうにてのひらの運命線
をみる

涙の哀愁 野田久子

一つぽの涙を慕ふ哀愁の争
あせにまみれた夕暮の瞬間の出來事

入道雲と稻妻の交錯する中で死にそこなつた蝶はは
だき
カンヴァスに浮ぶ顔に矢車草の影をみる
二つぽの涙は胸のふくらみをぬらし
思ひきり上げた顔に唇だけ紅い
ふみにじつた豆の葉っぱにひそむ初恋のペラ／＼に
むしられる日
しなびた朝顔に赤い薔薇がひかる。

夏の夜の一刻 垣しげる

黒雲の怒濤よ、
乗り越える月よ

群がり擴がり また重なる心の量
しつこい妖雲はメフィストの翼にあやつられ
騎士の群星の座を過ぎるその歩調に
さつと身を避ける雲の片袖
蚊に襲はれた私の瞳孔に遠く
月は寂しくも流れゆく姿。

雀のおる風景 紀幸子

泥溝に落ちて、そをかい雀らは
櫻ん坊に飛びついて一しきり轉つてゐた
翳る雲足の迅さ
四散するハヤの漣
悪童どもが丘の上で空気をたたくと
鐵籠の綱目を縫つて小猿が啼く

思念の贈物 松本祐順

伴奏のない秘めやかな感激
昨日の歡喜と花々をなつかしむ刻
明日の設計の影繪は浮ぶ
こころ靜かに暗闇を透かせよ
神秘は時に求める者を責めはしない
靜寂に漂ふ……時代の巨大な息吹よ
あなたに應はしい背景の美しき擴がりよ
早春の清適、ひたむきな思念の贈物
やさしくも豊かな御身の胸へ。

春の驛 田中豊

靜かな野驛へすべり込んだ客車
窓々は瞳のやうに皆開いて
それぞれの明るい貌がのぞいて動く
柵のあたりに櫻が綻びかけると
驛夫は爽やかに發車の手を舉げた

山里の眼が平野の遠い山脈を戀ふ
田舎の唯一の文化的施設は
のびやかに草原に建つたまゝ

夢 伊藤照子

雨氣を支へた老無花果樹は低く蹲つて
雀らは梢の暗に河豚となつて動かない
もはや時の歩みに驚かぬ心のやうに……

夢の切れ目……

そのぼうとした丘の蔭に山茶花がゆれる

秋風

秋風よ 硝子戸の外から そつと
去つた人よ 心の隙から そつと
こころを亂す 音楽が 呼ぶ
秋風よ 眼に見えぬ姿が 呼ぶ
かたくなな胸に抱きしめる一束の花

歪んだ道 加藤靜夜

散雲に目蔽れブランコに乗つて
空中の黑影を尋ねたかつて私の臉より
削り取られていつた黒い花は
いまもなほ南國の歪んだ道を
うづめてゐるであらう

夏が來た——海——影

私の肉體の庭に靜な池を掘らう
滅び行く者らをながめつゝ
綠葉の樹に飛び廻る翼が

二つに割れたメロンの馨りを空氣に染めて
蒼白い夕暮れの前に無力なむくろとなる

草刈の唄 朽木博

野面いちめん草叢の
これは粉々たる俗臭の世界か
愛と憎と叡智と猜疑と

貧情の鎌をひつさげ

ザクザクザクザク

行途担まれ四方八方

見えぬまつたく見えぬ

天の深さに

どろどろの血沼にふみこむだ

あがき のたちち 這ひすり廻り

刈つて刈つてかり狂ふ

唄つて唄つてうたひ狂ふ

音楽室で 稻垣美子

オルガンの黒鍵に くすり指がすべる

楽譜を はね違へた 右手の 倦怠

指先で 水平に ゆれた アスバラガスは

眼球を 充血させ 咽喉を じらす

カーネーションのピンクはハ調のラ、

生温つぽく ぼける

ボックスを引き出して

「尋ねれば」の曲を

ピアニッシモに レガートにならず

映画にあつた 奇妙な ワルツ

ふつ／＼と胸に來る

パステル畫の 華やかさで

午後の詩 邱 淳 洸

爆音の大きさに伴つて

兒らの叫びはひととき休まない

夏の午後――

熱し狂ふ六月の日光は

勇ましいプロペラに渦を捲き、

新校舎の屋根の上に跳あがり 跳あがり

弾力性に富んだ鳳凰木の緑にも

複雑な 光りの上に光りを重ねる

ふと、私は多くの美しい影繪の躍りを見た

このまぶしい校庭の地面に

やがて、兒らは空の一方へ驚歎の眼を据る

遊園地の高い梢のあたり、

まつ白な羊雲の上、

そして 深いふかい空の向ふへと

輕快に飛行機がとんでゆくのだ

何ものか宿つてゐるやうに

機台と翼とを銀色に光らせて

まつしぐらに

西へ……西へと、

兒らは 無心に見おくつてゐる

――臺灣にて――

故郷を發つ兵團 初井利彦

微風に街の並木に別離の唄が流れる

それを切つて續く軍靴の群・群……

春の埃は煙幕となつて聲なき聲がひそむ

なびく旗・旗の蔭に熱した銃身が光る

――運命の感傷を軽く胸に秘めて

――すべての感情と空想を越えて

魂の一角を噛みくだくひたむきな眸

やがて大陸の高梁を焼く日輪とともに

血と骨のクロスが描くものは何であらう

父の、兄の、同胞の劃した聖い構圖を守るため

遠く茫漠の征地の幻を見る一人一人よ、

烈しいリズムの重なりとなつて進む兵團

擴く全世界に向つて暗示される

逞しい線條にもりあがる民族の意志よ

想 念 郭直皓生

この銀色の魚のやうな雲から

あの青い岩のやうな雲へ

はるかな故里は波のうねりの

歌ふ鷗の巢のやうに

待つてゐるものよ！

あくがれてゐるものよ！

肉身の圓らかな集ひの幾夜よ

思ひ出の雲と波の掌をうつところ

白い花のやうな子供心の躍る呼吸に

今宵、胸に浮彫された自らの姿よ

冬の無花果樹 石田節子

あらはな裸形の腕を伸し

今日も厳しい寒風に戦を挑むもの

だが土色の肌には新芽と春の吐息を

滲みもつ無花果の樹よ

あゝ その憎らしいまでの沈着よ

かつての日 その太い葉脈に守られたのは誰だらう

差恥に悶える薄い皮膚の神を救つた物語の太古

アダムとイブの悲哀を擲げた梢にとどめ

微笑みかける敗北の姿よ

遠からぬ恵みの足音を待つ無言の無花果樹

濃緑の葉影に甘い實を掲げる日は何時であらう

消 息

▲川口敏男氏―詩集「花にながれる水」發刊

▲濱名與志義氏―エッセイ集「現代詩に關する七つのテオリア」近刊

▲渡邊和郎氏―詩集「洗車雨」近刊。

▲最上八平氏―滿洲國守備隊として出征。

▲竹内一氏―山口縣高水中學赴任。

▲池田日呂志氏―新詩集「夜への歌」近刊

▲梶浦正之氏―エッセイ「詩の原理と實驗」發刊。

▲國廣勝太郎氏―新詩集「天使の饗宴」發刊

▲柴俊介氏―吉尾、水谷氏等と香川詩話會を樹立。「香川詩壇」を創刊。

▲上松ちか子(石川)渡邊和郎(岐阜)邱淳沆(臺灣)津坂霞(下關)の諸氏編輯部梶浦宅を訪問。

▲詩話會―本誌名古屋地方會員主催で客年七月十七日廣小路明葉階上。西川貞康、梶浦義之、原比呂志、山口正二、大崎勝利、梶浦正之、加藤靜夜、丹羽莊一、丹羽哲夫、藤浪里子、小林正純の諸氏出席。主として詩理論を語つた。

▲新春女性詩會―本誌名古屋地方女性關係者主催、十四年一月七日編輯部梶浦宅にて小林節子、野田久子、伊藤照子、池上ひさ子、藤浪里子、伊藤文子の諸氏

冬 石塚まき子

ウルトラマリンの不氣味を漂はす

きびしい光の空の底に

長く横はる枯草の堤の一條

飛び過ぎる鳥らの姿も見えず

つゞくは脅えた猫柳の列のみ

僅かな緑を顫はす乾いた麥畑

すべては包まれた單調な冬の力へと――

北満の蓄舎 大河原裸木

夕暮、放牧の馬は人の子のやうに獨りで歸る

闇の層を透す馬のものの囁む音の深夜

秣をやると馬の息が顔にかゝる雪の朝

このプログラムを日々繰り返す北満の蓄舎よ

池田日呂志著 最新刊

詩集 夜への歌

菊倍判帙入美本・花の挿繪三葉

内容舶來帳簿紙三十葉

定價貳圓 (送料十四錢)

刊行所 河 發行所

東京市品川區大井山中町四三九
振替東京九一六番

★ 注 意 ★

◎ 入會希望者は作品に返信料を添へ會則を請求され

たし。

◎ 新刊詩書並に詩誌の批評をなす。寄贈を望む。

◎ 本誌第一輯及第二輯を見本として特價提供をなす

三錢切手同封申込次第詳細通知す。

◎ 次輯原稿會費締切六月末日(嚴守)

◎ 右の通信はすべて下記編輯者宛の事

愛知縣海部郡佐織村勝幡 梶浦正之

振替名古屋二四八三五番

編輯後記

先づ渾刊の御詫びを申し上げるのであるが原因は印刷部の職工難と諸氏の作品を揃へたかつた事との二つである。早く加盟された方に全く心苦しい次第であるから次輯からは諸氏各々心懸けて締切を厳守されたい。これは全國同じ現象であるが、現下は吾々の事業の最大受難期で、印刷紙價は高騰どころか缺乏である。しかし、小生も齡壯年に垂とする迄この道に苦勞して來た者の一人だ、責任を以て立つた以上、ちよつとやそこの支障で腰を折るやうな事はしない覺悟であるから仲間諸氏の不斷の支援を御願ひして置く。

本輯には現詩界へ何らかの示唆を與へると自信する濱名氏と小生のエッセイ。それからヴァレリイ、エリオットの再認識、川口氏の譯になるミチエル・ロバアツの長詩は思想性の具象化に一つの新しい方向を示すもの、竹内一氏を始め會員會友諸氏の一粒攢りの力作等すべては重厚性と迫力を以て讀者諸君へ御届けする欣をもつ。拙著「詩の原理と實驗」は意外の好評を以て迎へられた。未讀の方は是非御一讀あらむことを切望する、求めて頂きたいが、求められない方は、全國の主要圖書館なり友人なりから借りてでも一應眼を通して頂きたい。決して諸君を失望させるやうな事はないと自負してゐるが故に。(かぢうちら)

梶浦正之氏新著 全國發賣 詩の原理と實驗

品切の節は發行所へ！

四六判厚表紙
特別函入美本
定價壹圓參拾錢
送料拾錢

★今日の詩作の根柢！

本書の詩界に與へる利益と暗示に對しては一点の疑問もないであらう
(ヨネ・ノグチ)
慎に論旨明晰、所論公明にて啓發せらるるところ多く又小生平常の所懐とも相似のところも多く精讀を期してゐる。
(高村光太郎)

本書の特色は理論のための理論に墮しないで、所謂實驗を基調として立論してあり、極めて直裁簡明に書かれてあるから、例へ初心の人であつても心潜めて反覆讀したならば大いに獲る處がある。(河井醉茗)
★今日の詩學の確立！

慎に遺憾千萬ではあるが今日尙「詩とは何ぞや」「詩と散文との區別」等々の問題にハツキリ回答し得る人が幾人あるであらうか？この根本問題は自由詩發生以來不明の儘で放擲されてゐた。諸君が同種の書物の二冊や三冊は必ず讀んでゐる事も解つてゐる。それらが「新しい」とか「古い」とかが問題ではないのだ。五年や十年で轉覆されるやうな理論が何にならう。諸君は何よりも先づ自らの胸に「解決」か「未解決」かと反問すべきだ。これを識らざるは詩人どころか、文化人としての大きな恥辱である。本書は文學の進化論的立場から在來の一切の詩學を批判した最初のもので、今日の詩作を心理學的に分析解剖して、詩に關する明確な組織的新概念を與へた唯一の文獻だ！發刊早々全國の主要圖書館並に各大學へ寄贈の目的で大部數の注文があり、また人から人へ傳へられた評價に據つてさへ初版の半數に近い配本を觀た事實の前に著者と刊行者とは其の使命の如何に重大であつたかを今さらに痛感する次第である

詩文學研究會刊

東京市麻布區霞町一番地

昭和十四年五月二十五日印刷
昭和十四年六月一日發行
【定價六拾錢】

詩文學研究會
編輯者 詩文學研究會
發行所 東京市麻布區霞町一番地
印刷所 詩文學研究印刷部
發行所 詩文學研究會

發賣所 東京市神田區神保町 上田屋書店
大賣捌所 東京堂 東海堂 北隆館 大東館

國廣勝太郎

第二詩集

天の使の饗宴

跋文 浦瀨白雨

序文 梶浦正之

この新詩集は現實的な素材が濃厚に採り入れられて多彩な形態を以て表現されてゐる。この道程は頗る順調であつて、君の前途の多様性を暗示するものであらう。ダンテ的な想像性の昂揚、ヴェルアラン風な構造の壯麗等は君の全身全靈的な努力の特異な詩格に他ならぬものである。

(序の一節)

定本二百部限定出版
菊半截・頁四十六・紙厚表

定價金六拾錢

詩文學研究會版

東京市麻布區霞町壹番地

詩集

洗車雨

渡邊和郎

★

★

その手固い詩法の得意、新鮮な對象への格闘、しかも動じ難い求心的角度等について若冠よく之を成果せしめたことは一つの奇蹟とも謂ひ得よう。その詩篇は現實の烈しい渦中に身を置く一葉の光が狂ひ廻はされつゝも不斷にその中樞へと進んでゆく逞しくも靜かな温情の姿に似てゐる。

君の出發の朝は正しい空氣の姿勢をとつてゐる。恐らくは社會人としての前提的な資格のパスポートも君には備はつてゐる事であらう。この青年の根底に藏はれた人生觀もいつとはなしに具象化されて來る日も……はなれないやうに想はれる (序の一節)

★

★

序文 梶浦正之
跋文 長尾和男・鈴木奎吾

菊判百餘頁・函入美本・定價壹圓

詩文學研究會版

東京市麻布區霞町一番地

川口敏男詩集

花にながれる水

濱名與志春著

新四六判・クロオス表紙・函入・二百余頁
定價 一圓八十錢・送料 十四錢

ここに詩と文化の本質的な交流關係をば極めて科學的に分折しつゝ、しかも教養ふかき著者の蘊蓄を惜げなく傾けて、現代詩の全貌を客觀的に言及し竭した。ともすれば砲煙の響きのなかに、眞に來るべき精妙な新思潮の世界は被ひ消されむとするとき、今日の詩が奈邊にあるかを闡明すると同時に明日の詩のコオスをも暗示してゐる、待望久しかりし好エッセイ集である。

進歩的な世界觀の上に新しい良識と確乎たる信念を培ひ方法づけられた解毒的な一九三九年の怖るべき詩論集!!この颯爽たる登場に注目せよ!!

川口君 川口敏男君 君はあたらし手巾に白い糸で縫ひこりをする たんぼの花さく苑のあまい空氣をアカシアの泪を 莖を フウセンを ナスタチュウムを プリムラを 石の睡りを 水に呼ぶ思念の毛髪を指の羞恥を ガス入りランプの太陽の光りに それは華麗をきわむる そこには感覺を絶したるものがある 感覺の極致はもはや魔酔である フレッシュなエスプリ それから塩のやうな叡智 君の明晰がある 君の詩は食後の果實ではない 渴きを醫する少量のアルコール含有の飲料水である。(田中冬二)

この譬へやうのない微妙な匂ある露を造り得るものは 敏男・川口を惜いては他に皆無であらう。この雰圍氣を好むと好まざるとは最早イスマや角度の問題ではない。其處に何らかの異議ありとすれば、それは感覺に於ける人種の距離を示すのみであらう。(梶浦正之)

四六判・内容アート紙・箱入優美本・價一圓五十錢
送料 十錢・好評 噴々・殘部 僅少

現代詩に關する七つの

テオリア

★東京・昭森社版・詩文學研究會 取次★

Étude
de la poésie
No. 3

詩文學研究

第三輯

60 sen